
虚虚

目瞭然

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚虚

【Nコード】

N7947U

【作者名】

目瞭然

【あらすじ】

西下上東高等学校では女子の登校拒否が多発していた。

元凶は1人の男子生徒『星木藍』。

生徒会長の『良真義凜』が彼との接触を決心した日、時期はズレの転校生が。

八月二十三日に消えます（作者が）

ブローグ

私の名前は海耳未美。うみみみみ 西下上東高校に通う2年生。今日は、ひょんなことから付き合い始めた彼氏との初デートの日。ちなみに遊園地デート。

時刻は11時45分。彼は10分前行動が基本なので、今日はちよつとびっくりさせるんだ！ ムッフッフ。これで彼もイチコロだぜい！

…彼は来なかった。

\\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\

16時30分。遊園地から離れていく未美。俯いているので、泣いているのかもしれない。それをビルの屋上から眺める1人の少年。彼は我慢の限界だった。

「…ぷつ…ぷつぷぶ…あはははははははハハハ！！」

とうとう堪えきれず笑いだす。

「あははっ！ 最っ高！ あーあ、また泣かせちゃったぜ。あははハハ！！」

いつまでも笑い続ける少年。名前は『星木藍』ほしぎあい、西下上東高校の2

年生である。

転校生

私の通う西下上東高等学校では、女子生徒の登校拒否、不登校が問題になっていた。

元凶は一人の男子。元々、レベルが高い割に緩い高校だったので、制服を着崩したり、髪を染めたりする生徒がいたが、先生もそれを注意せず、生徒会長の私はまさしく孤軍奮闘するはめになり、ストレスで来年辺りハゲるんじゃないかと毎年思っていたが今のところ平気で、肩までのストレートは健在、ついでに私の外見をもう少し追記するなら、まず先に眼鏡をかけてないことをはっきりさせておきたい。

…あれ？ 話が盛大に逸れてしまった。

つまり、自由な校則故、チャラい生徒が多く、そんな中、2年の星木藍という男子がこの度の女子不登校事件の元凶なのである。

被害にあったのは全部で7人。全員が不登校になる直前に彼と付き合っていて、すぐにフラれていた。が、彼女達から言質を取ることは出来なかったため、先生も手出し出来ないでいる。

同じ理由で私も何も出来ないでいたが、とうとう被害者が7人になくなってしまったので、彼に接触することを決心した。

そんな私の決心を知ってか知らずか、その日彼女は転校してきた。

9月23日。午前8時30分。朝のHRの時間。2年A組は静まり返っていた。

「ひとづな人為七です。よろしく」

まるでお人形さんみたいな色白の女の子。加えて金色で緩くウェーブのかかったロングヘア。そのため、ハーフにも見えてしまう。女子である私まで見とれてしまうほどの美少女だった。ついでに黒板に書いた字も綺麗だった。

「…というわけだ。季節外れだが、みんな仲良くするように。それで席なんだが…」

彼女の自己紹介を補足し終えた先生だったが、次の『どこの席に座らせるか』という段階になって急に口をつぐんだ。

先生が困るのも無理はない。2Aには空いてる机が2つある。が、1つは教卓の正面で、もう1つは一番後ろの左端なのだ。

真面目な生徒は同時にほとんどが恥ずかしがり屋のため、多くは2列目以降に座り教卓前が空いてしまっている。そして後ろは主に落ちこぼれ生徒が集まっている。

さすがの先生も教卓前の席に転校生を座らせるのは気兼ねしてしまつようで、かといって落ちこぼれのテリトリー、それも左端は馬鹿男子の密集区域なので余計に薦めづらいようだ。

結局、「あの、私は前でもいいです」という人為さんの発言で彼女の席は決まったのだった。

私の隣に。

「私は良真義凜^{よしまきりん}。よろしくね、人為さん」
「七でいいよ。」ちんこそよろしく」

泣いている少女

「すごいね、七さん！」

「そんなことないってば」

朝のHR延長の影響を受けた一時限目。しかし、七さんの予想外の秀才ぶりに授業はスムーズに進み、滞りなく終わったのだった。

そして今は昼休み。

「人為さんって前どんな学校に通ってたの？」「お家はどこ？」

「彼氏は彼氏は？」「その髪って染めてるの？」

定番の質問攻めをどうにかくぐり抜けた私達は、七さんに校舎を案内していた。

「いやいや、一時限目のアレは大学入試レベルだったよ」

「凜さんだつて二時限目は名解答連発だったじゃない」

「いやー、得意科目だったから。それくらいは全国レベルにしないと」

「まあ、もう九月だしね。そろそろ大学入試を考え始めなきゃ」

「はい、そこまで！」

と言って、私と七さんの会話に割って入ったのは城峰唯^{しろみねゆい}。私の幼なじみ。頭はさほど良くないが、聞き上手で話し上手、話が合わな

くても馬は合う、そんな女の子。故に友達は妙に多い。ちなみに彼女はバスケット部で背が高く、ボーイッシュな喋り方が特徴で、髪はつねにポニーテールだ。

ただ、今重要なのは唯の外見ではなく頭がそれほどよろしくないということ、つまり今の話題には着いていけず、ほとんど口を開くことはなかったのである。

「唯、いたんだ」

「最初っからいたっつーの！」

なんてお喋りしながら、私達三人は屋上への階段を上っている。七さんから、屋上が見たい、という要望があつたので、今日は屋上でお昼なのだ。

屋上。眺めが良いわけでもないため、昼食場所としての人気はそこそこ。平均は五、六人で、一人もないこともざらにある。

が、今日は先客がいた。

私達が開ける前に、ドアは勝手に開いた。そして、茶髪の女の子が出て来た。

茶髪で小さめの可愛い女子。見覚えがないので、おそらく一年生か三年生（見た目一年生）。彼女は私達と鉢合わせして驚いているようだ。視線が合う。が、すぐに顔を俯き気味に逸らし、走り去った。

茶髪は校則違反とか、廊下は走るなとか、注意する気は起きなかった。

彼女は泣いていた。

私達が彼女の走り去っていった階段を見ていると、背後、つまり屋上から声がした。

「やあ、良真義凜さんに城峰唯さん、そして人為七さんじゃないですか」

振り返ると、そこには星木藍がいた。

星木藍

「美人が三人揃ってお昼ですか？ ぜび一緒に一緒にしたいですね」

言いながら彼はこちらに歩み寄って来る。

軽薄な口調に軽薄な態度。この男が、星木藍。

無駄な装飾は特に無し。Yシャツも一応ズボンにしまっている。下げパンだが、ベルトも普通で校則には引っ掛からない。これだけならわりと問題ない。が、彼の髪は金色だ。

校則違反。いくら似合っているように、イケメンだろうが、駄目だ。生理的に受け付けられない。七さんみたいに元々ならともかく（あれ？ 確証は取っていないや）、染髪とか有り得ない。こっちは来るな。

「……誰？ 何で私の名前知ってるの？」

七さんが言った。が、コレは別に問題じゃない。七さんほどの美少女転校生なら、もう誰が知っていてもおかしくない。奴なら尚更だ。

「それは別に謎じゃないよ、人為さん。君みたいな美少女転校生ならすぐに噂になるからね。特に俺みたいな奴のアンテナにはすぐに引っ掛かるよ。あつ、俺は星木藍ね」

そら見たことか。

「じゃあ、何で私達の名前まで知ってたんだよ？」

これは唯の言葉。ただまあ、私は新生徒会長としてスピーチを行ったばかりだし、唯は交友関係が広いし、それ以前に同学年なので、これも問題じゃないと思う。

「いやいや、良真義さんも城峰さんも有名人じゃないか。それに俺達同級生だろ」

やはりこちらも、予想通り

「ていうか、俺は学校中の可愛い子は覚えてるからね。君達ほどのレベルなら知ってて当たり前だよ」

……予想以上だった。もう完全に受け付けられない。寄らないで下さい。

とは言え、私だって空気は読める。流れからすると、次に発言するのは私だろう。仕方なく、私は現状で一番問題であろうことを尋ねる。

「……さっきの子は何なの、星木藍さん？」

「あれ？ 俺のこと知ってたんだ」

「知ってますよ。なんせあなたは学年一位ですからね」

「まあ、だろうと思ってたよ、学年二位さん」

そう、実は現二年生の一位は奴で二位が私なのだ。七さんは驚いたようで、目を丸くしている。まあ、こんな場面珍しいしね。ちなみに、唯は百八十位。

「それで、あの子は何？」

私達と彼の間にはもう五メートルもない。私と唯はさりげなく、

七さんを庇うように前へ出る。

「うーん、……今は他人かな」

「さつきまでは？」

「……………彼女？」

場が静まった。女子陣から冷たい視線が彼に注がれる。

「……………あれ？俺今超アウエー？」

「……………」

私達が無言を貫くと、今日のお昼は諦めようかな、と言って彼は階段を下りていった。

「……………彼は何なの？」

星木藍がいなくなつてすぐ、七さんが呟いた。それに私達は一言で答える。

「……………女の敵だよ……………」

翌日、星木藍と人為七が付き合っているという噂が流れた。

ツンデレ

星木藍。成績優秀、スポーツ万能、おまけにイケメン。金髪ではあるが、授業には熱心に取り組み、教師受けも悪くはない。女子からの人気も高いが、男子にも友達が多い。が、最近悪い噂が流れている。

『そんな彼と転校生・人為七が付き合っている』

私がそれを聞いたのは、朝。その日、普段はベル着常習犯の唯が、わりかし早めに登校してきた。

「あれ？ 今日はずいね唯……………って大丈夫？」

肩を上下させて息をする唯に、私はとりあえず尋ねる。

「や、やべーぞ」

「？ 何がやばいの？」

「ひ、人為さんが……………」

「七さんが？」

「星木藍と、付き合ってるらしい！」

「べ、べ、別に、っ、っ、付き合ってるとかじゃ……………」

慌てふためく七さん。今は朝のHR前で、七さんの周りには私と

唯含め、十数人の女子が群がっている。
唯が言う。

「でも、今日二人並んで登校してきたらしいじゃん」
「た、たまたま一緒になっただけだつて」
「でも、楽しそうに喋つてたつて聞いたよ」
「そ、それは……その……」

黙る七さん。うん、七さんはツンデレだな。……つて、そうじゃなくて！

「七さん……私達、昨日言つたよね」
「……でも、言うほど悪い人には見えなかったよ」

昨日のあの後、七さんには女子の不登校多発事件について、一通り話してある。

にも関わらず、コレだ。星木藍の手練手管が凄いのだろうが、さすがに昨日の今日では私も頭に血が上る。

「七さん、奴は本当に危険なんだよ。今まで何人の女子生徒が奴の手に掛かったと思つてゐるの！」

「奴つて……藍さん？ ていうか、それだつて噂でしょ」

「でも、昨日七さんだつて見たじゃない！」

「あれは、……きつと間違いだよ……」

「『間違い』つて、そんなわけ」

「何でそんなこと言うの！ あつ、まさか凜さん、藍さんのこと」
「いやいやいやいや、ないないないない、絶対ない！ それはない！」

「……そ、そっか……（良かった）……」
「今『良かった』つて」

「い、言っ
てない！！
言っ
てないから」

知らず知らずのうちに私と七さんの口論になっていた。結局HRが始まり、その場は治まったが、私と七さんの関係にはヒビが入った。

今回分かったことは二つ。七さんはツンデレだということと、ほぼ間違いなく星木藍に惚れているということ。

こうなったら、星木藍を何とかするしかない。つまるところ、彼が善良な普通の男子高校生になれば問題は全て解決するのだから。となれば、善は急げ。勝負は今日の昼休みだ！

飄々

昼休みになった。

私は一人で戦場に向かう。まあ、隣のクラスのことなのだけど。ドアを開け、私は奴の席へと向かう。奴の席は教室のど真ん中にあるので、机をいくつか避けながら進む。

奴は隣の女子（美人）と談笑しながら昼食を取っていた。私が奴の目の前に立つと、彼女は訝しげな視線を向けてきた。対して奴は、

「あれ、凜さんじゃないですか」

と、特に驚いた風も無く、言った。

ていうか、いつの間にか呼び方が馴れ馴れしくなっている。虫^ズが走るわ。

「星木藍さん、少しお話があるのですが」

「何の話かな、凜ちゃん」

全身の毛が逆立つのを感じる。吐き気がする。しかし、今は呼び方など 気にしている暇はない。とりあえず、私は単刀直入に言うてみる。

「七さんから手を引いてくれませんか」

「嫌だ」

即答だった。まあ、予想通りだ。私としては奴を改心させるのが目的なので、動揺はしない。が、周囲の人達は静かになった。こちらに注意を向けたようだ。

「ていうか、唐突にどうしたのかな？」

薄い笑みを浮かべたまま、奴が言った。私もなるたけ平静を装って、返す。

「あなたが女子生徒不登校多発事件の犯人である、という噂が流れています」

「わあー、心外だなあー（棒）。俺が犯人なわけないじゃないですかー（棒）」

始終棒読み。私を嘗めているとしか思えない喋り方で、さすがに腹が立つ。

「……しらを切るつもりですか。では、昨日の泣いている少女はどうしますか」

「ナンノハナシデスカ」

「とぼけないで下さい。不登校になった子は全員、直前にあなたと付き合っていました。大方、酷いフリ方でもしたんじゃないですか？ 昨日の子が泣いていたのも同じ理由では？」

苛ついた私は一気にまくし立てる。が、

「やだなあ何言ってるんですか偶然ですよ偶然いやー偶然って恐ろしいっ」

……この野郎！

奴はいつまでもテキトーに答え続けた。周囲の人々が不信感を募らせるのもお構いなしか。

私は激しい憤りを感じる。同時に諦めの念が心を過ぎる。

奴は改心などしないのではないか？

だつて奴は笑っている。話しをすればするほど、より楽しそうに顔を歪めていくのだ。それは、思ひ出し笑いのように見えた。

こんな奴が改心などするのだろうか。やっぱり、七さんを説得するほうが現実的ではないか？ ……いや、駄目だ。それでは根本的な解決にはならない。それに、諦めるには早過ぎる。頑張れば、どうにか

その時、大きな音を立ててドアが開いた。

教室中の視線が移り、私も驚いて、そちらを見る。そこには、

昨日の茶髪の女の子が、カッターを手に立っていた。

盾

2年A組の隣のクラス。つまりB組。に、茶髪の少女がカッター片手に乗り込んで来た。

茶髪少女は目を充血させて、ある一点を睨みつけている。カッターの刃は極限まで伸ばしている。

それを見た教室内の人々は私を含めて、全員固まっている。ただ1人、星木藍だけは薄い笑みを崩さない。と、突然彼女が叫び出した。

「@£!% %†!」

それは言葉になっただけで、何が言いたいのかさっぱり分からなかった。が、それで私は覚醒する。他の人達は依然ポカンとしているが、その差はおそらく情報の有無だろう。

私は、彼女が奴にフラれていたのを知っている。

つまり、彼女の目的は

思考が終わる前に、彼女は奇声を上げて、こちらに向かって来た。そこで、教室内の人達はようやく危険だと気付いたらしく、悲鳴を上げた。多くの人は教室の隅や外に待避していく。

が、奴の右隣の席にいる美人系少女は動かなかった。何故こちらに向かって来るのか理解出来ないようだ。

茶髪少女が向かって来る。しかし、目指す星木藍の席は教室のど真ん中にあるため、机が障害物、むしろ盾となり、彼女の行く手を

阻んでいた。彼女は舌打ちしながら、机を避けて近付いて来る。

すると、今度は美人系少女が、茶髪少女の前に立ち塞がるような構図になった。

美人系少女は驚いて動けない。奴は微笑を浮かべたまま動こうとしない。

そして、茶髪少女は邪魔な少女を排除すべくカッターを振り上げた。

「危ないっ!!」

とつさに私は二人の少女の間に入った。勝算も何もないが、生徒会長として生徒の危険を見過ごせない。

「
£ %!!」

奇声と共にカッターが振り下ろされる。

血が宙を舞った。

が、それは私の血ではなかった。

カッターが私に刺さる直前、いつの間にか立ち上がった星木藍が、その刃を左手で掴んでいた。血は彼のものだった。

「「「!!!!」」」

私達は驚いて目を見開く。

「あー、わりと痛いですねー」

彼は普段通りの軽い口調で言った。

……………助けてくれた？　こんな奴が、あの星木藍が、私を？
私は混乱する。

「
……！？」

数瞬後、茶髪少女が再び暴れ出した。が、彼の手はカッターを離さない。

結局、先生達が到着して茶髪少女が取り押さえられるまで、彼はカッターを離さず、笑みも崩さなかった。

保健室

「その……さっきはありがとうございました」

「いやいや、別に大したことじゃありませんよ」

あの事件の後、私達は怪我をした彼の手当をすべく、保健室に来ていた。

「そんな、手もこんなに深く裂けてるし……制服も汚れちゃって

……」

「大丈夫、大丈夫。どうせ衣更えの季節だし、ブレザー着れば分かんないよ」

そう言う彼はやっぱり笑っているが、心なしか優しい笑みに見えてくる。もしかして良い人なのでは、とさえ思ってしまう。金髪じゃなければ好きになっていたかもしれない。

「でも、私がいなければ、あなたならもつと上手く止められたよ
うな気がしますし……」 「うーん、とりあえず『あなた』って辞
めない？ 名前で呼んでよ、凜ちゃん」

「……………星木さん」

「硬っ！ ……まあいいか、それで」

やっぱり、悪い人には見えない。

と、思った直後

「ていうか、凜ちゃんが間に入らなければ、俺も動くことはなかっただろうから、気に病むことないよ」

……………ん？

「えっ？ どういう……………」

「凜ちゃんだから守った……………」というか、隣のあの子なら助けるつもりはなかったんだ」

「???」

「何て言うかまあ、……………盾？ ああいうのが来た時のために、あの席を選んで、あの子も隣にしてたんだ。盾代わりに。ほら、俺クラス委員だから、そういう小細工しやすい……………ってあれ？」

「……………」

「……………もしかして、俺、墓穴掘りました？」

彼の問い掛けに、私は答えない。というか、答えられない。彼が
良い人なのか悪い人なのか、判断がつかなかった。

「……………とにかく、有り難うございました。では」

「あ、ちょ、凜ちゃ、良真義さーん!!」

私は彼を残して、保健室のドアを閉めた。

翌日、学校中は昨日の『茶髪少女事件』の話で持ち切りになった。そんな昼休み、唯が私の前にやって来た。

「どうしたの……って大丈夫？」

例によって、肩で息をしている唯。ついでに今日も隣に七さんはいない。

「や、やベーぞ！」

「？」

「人為さんが」

「……七さんが？」

「星木の奴と……」

唯は一拍開けてから、言った。

「遊園地で、デートするらしい……！」

尾行

9月28日 日曜日。

星木藍と七さんの遊園地デートの日。

遊園地デート。彼・星木藍の常套手段だ。不登校になった女子の内4人、つまり半分が直前に彼と遊園地デートの約束をしていたらしい。要するに、遊園地デート＝デッドだ。

そんな危険度MAX&現行犯逮捕チャンスのをデートを尾行しないわけにはいかない。そういう理由で私は現在、絶賛尾行中である。

が、今のところ何の問題もない。

2人共待ち合わせの10分前には遊園地に来て、その後も普通のカップルっぽい行動をしていた。怪しいところなんか一切ない。

そして、現在時刻は15時過ぎ。今は七さんのリクエストに応えて、彼が2人分のチョコスを買に行っている。

チョコスは少し先の角を曲がった所にある屋台で売っているため、現在彼の姿は見えない。

七さんはベンチに行儀良く腰掛けている。無駄に可愛い。

私はというと、もしかしてあのまま七さんを置き去りにする気では、と無理矢理な仮説を立てて、少し離れた物陰から七さんを眺めている。

分かっている、無理があることぐらい。今日は何も起きないだろうことも、うつすら感づいている。

しかし、貴重な日曜日に勉強もせず、こんなところまで来てしまったからには何かないと割に合わない。もちろん何も無いのが一番

だと分かつてはいるが、やはり嫌な期待をしてしまう。何か、起これ！

すると、七さんにチャラついた男達が近付いて来た。

「ーっ!!」

な、何か起きたあああ！ が、全然うれしくない。むしろ、やつちまった感が漂っている。私が念じた所為ですか！？

「ヘイヘイ、彼女お茶しなーい？」

「ギャハハ、お前古いつて！」

「まあ、そういうことだから俺達と遊ぼうぜ」

「君カワイイね。どこ高生？」

「お前は顔がイカツいんだよ。怯えちゃってんじゃねえか、かわいそうに（笑）」

計5人のチャラ男。

私が念じたからこんな状態になったのかは判然としないが、でも念じたことは確かかわけで、私の胸に罪悪感が込み上げる。何とかしなければと思う。が、私1人で何とかできる状態でもない。

とすれば、彼に頼るしかない。しかし、周りには彼どころか人っ子1人いない。なんて間の悪い、と私は奥歯を噛み締める。

恐らく、彼は来ないだろう。なぜなら、今なら逃げても大義名分が立つからだ。身の危険を感じたからとか、他の人を呼びに行つたとか、いくらでも。

さつきから七さんの声が聞こえない。きつと怯えているのだろう。
私が行くしかない。意を決し、私は物陰から飛び出す。

と、突然チュロスが飛んで来て、1人の男の後頭部に突き刺さった。

尾行（後書き）

さて、見て下さってる方がいるか分かりませんが、とりあえず更新遅くてごめんなさい。

そしてごめんなさい。

次も遅くなると思います。

やることがあったりなかったりなので、はっきりとは言えませんが9月頃になるかなと。

誠に申し訳ありません。

誤字・脱字・誤表現などありましたら報告頂けると有り難いですが、本当にすいませんなので、何かもう、ごめんなさい。

何だチミは！

「藍さん！」

七さんの声が異様によく響く。原因は、左手にだけチユロスを持った星木藍、それと私だろう。

ほぼ同時に、しかし全く別の方向から私達2人が出現したため、だれもかれも混乱状態なのだ。チャラ男達は何とも言えない微妙な表情で、私と彼に交互に視線を向けている。

「な、何だてめえら！」

少しして、チャラ男軍団の一人、オールバックの金髪君が声を発した。お願いだから彼と一諸にしないで下さい。

オールバック君の問いから数秒後、星木藍が口を開いた。

「……ねえ、その娘から離れてくれない？」

チャラ男軍団の問いを完全にスルーした星木藍。そんな彼の態度を見て、チャラ男軍団の顔から戸惑いの色が消える。代わりに血管が浮いた。

「ああ！？ シカトしてんじゃねえよ！」

「誰だ、って聞いてんだろうが！」

「何だチミは！！！」

「「古いよ！！！」」

怒声が飛ぶ。一部ベクトルがおかしかったため、イマイチ緊張感がない。

しかし、相手は5人。ネタが古い男は小柄だが、他は全員180cm以上の長身だ。対してこちらは、七さんを含めても3人しかおらず、内2人は女子だ。戦って勝てるとは思えない。逃げたいが、七さんがチャラ男に囲まれているため、それも難しい。未だピンチだ。時間を稼いで救援を待つのが賢明だろうか。

しかし、そうそう上手くもいかず、ネタ古男が彼に近寄る。

「もっかい聞くぞ？ 何だチミは！？」

『古いよ』という心の声が聞こえる。

それに彼は、

「……………」

「つておい！！ 黙んなよ！ そこは普通『何だチミはつてか？』
そうです私が変なおじさぐばえ！」

古男の熱いセリフは、星木藍の振るった右拳によって終わりを迎えた。

「マサ！！」

「何しやがる！！」

「てめえ！ ナメたことしてんじゃねえぞ！」

チャラ男軍団がさらにヒートアップする。これでは時間稼ぎなんて出来ない。

今度はオールバック君が彼に近寄って行く。古男とは打って変わって長身（目測185cm）のオールバック君。星木藍よりも背が高い。

オールバック君は咆哮を上げ、右拳を振かぶる。

「うおらああー!!」

私はとっさに目をつむる。

そして、バキッという嫌な音が

いつまで経っても響かない。

代わりに、ドザッという何かが落っこちる音が聞こえた。

私が恐る恐る目を開けると、オールバック君が地面に突っ伏していた。顔から地面に突っ込んでいる。

一体何が起こったのかと顔を左右に振ると、七さんの座っているベンチの前で2人の男が向き合っていた。……2人？

疑問に思うと同時に、視界を2つの何かが過ぎる。

それは回転している人間だった。ズザアッという音と共に2人の人間が地面に顔から着地し、動かなくなった。

立っているのはチャラ男1人と、星木藍。

何だチミは！（後書き）

はっはー。

次は9月とか言ったのはどこの誰でしょう（現在8月11日）。
全く、嘘はダメですよ。

次いで、思い付きを言ってみようのコーナーです。

最近内容が『学園もの』なのか分からなくなっております。
もしかしたら、ジャンル変えをするかもしれません。しないかもしれ
ません。ご注意下さい。

誤字・脱字・誤表現などありましたらご報告頂けるとありがたいで
す。

続くピンチ

睨み合う最後のチャラ男と星木藍。七さんはベンチに座ったままキョトンとしている。

私の位置からだとなりの間に七さんが挟まれているように見え、さながら一人の少女を巡って二人の男が争うという古臭い映画のワンシーンのようだ（あながち間違ってもいない）。まあ、状況や表情的にチャラ男の方が明らかに劣勢なので、映画ほどドラマチックな感じはしないけど。

「……手前、柔道でもやってんのかよ」

チャラ男が周囲をチラチラと探りながら言った。逃げる算段でも立てているのだろうか。しかし、

「いや、俺はサッカー部だよ」

星木藍はあっさり否定した。算段を立てる暇もない。

彼がチャラ男に向かって一歩近付いた。考える時間を奪われ、プレスチャーまで掛けられたチャラ男は青ざめた顔で一歩下がる。間髪入れず、星木藍は再度距離を詰める。チャラ男とは打って変わった、顔にはいつもの微笑が浮かんでいる。……一々プレスチャーの掛け方が上手いのは、女子7人を引きこもりに追い込んだ分のキャリアの賜物だろうか。

間を空けて、星木藍がさらに一歩近付く。チャラ男まであと3m。チャラ男の顔から汗がダラダラと溢れ出る。

そして、星木藍が、もう一歩、

「あ……ああああああ！！！」

耐え切れなくなったらしいチャラ男が、絶叫して飛びかかる。拳を思いきりふりかぶった。対して、星木藍は広げた右手を静かに前に出すだけ。よほど混乱しているのか、チャラ男はその右手に向かつて拳を突き出す。

予定調和の如く、二つの手が重なる。

が、音が鳴らない。

ぶつかる瞬間、星木藍が身体を捻り、腕を後ろに引いたのだ。チャラ男はそのまま前につんのめる。

前傾姿勢のチャラ男。そのお腹に星木藍が、躊躇なく膝を突き込んだ。

「おぶっ……！！！」

短く、小さい声。音や声がしなかったのは、全員お腹をどつかれたからだったのか。

星木藍はいつの間にかチャラ男の手を握り込んでいた。膝蹴りの勢いが無くならないうちに、その手を引く。

そして、人間が宙を飛ぶ。

二回転ほどして、チャラ男が地面に突っ込んだ。

「ふう」

一息ついた彼。5人を一蹴して『ふう』なのか。

「あ……星木さん！」

言って、七さんがベンチから立ち上がった。最初からほとんどなかった距離を0まで詰めて、互いに『大丈夫？』『怪我しなかった？』等と言い合う。

その様子は明らかにカップルのソレで、私は安心した。

もしかしたら、全部私の思い過ごしだったのかもしれない。女子不登校事件は彼とは一切関係ないのかも。

だってカップルにしか見えないし、彼もちゃんと来たし、『星木さん』って呼んで………ってアレ？いつもは、確か、名前呼

「それで、何で良真義さんがココにいるの？」

見ると、七さんが笑顔でこちらに指を向けていた。

続くピンチ（後書き）

結局ジャンル変更はしませんでした。

変えるにしても、どのジャンルにすればいいかわからない、が主だった理由です

誤字・脱字・誤表現などありましたらご報告頂けるとありがたいです。

パン

さて、服装の話でもしようか。まず七さんの服装は、白いシフォンブラウスに同系色のロングカーディガン。下はピンクのスカートにロングブーツ。金髪と相まって、とてもおしとやかな感じがグッドだ。対して星木藍は白めのカットソーの上に、黒いジャケット。下も黒いジーンズで、全体的に黒く、金髪がよりきらびやかに見える感じに仕上がっている。そして私は制服と。何故制服かといえば制服が好きだからで、外出時も大概制服なのだ。

「で、何でココにいるの？」
「うっ」

健闘虚しく、七さんの笑顔から逃れることはできなかった。

私達は今3人並んでベンチに座っている（チャラ男をやつつけたあの場所のあのベンチではない。移動した）。もちろん真ん中は七さんだ。危うく地面に座らせそうになったが、星木藍 いや、星木さんにフォローしてもらい、スカートが砂まみれになるのはギリギリ回避できた。が、

「で、何でココにいるの？」

隣の笑顔が怖い。やむにやまれず、私は口を開く。

「……………び……………尾行してました」

圧迫感が増す。堪えろ、私！

「何で？」

「そ、それは、その……」

くうつ、何て質問をぶつけてくるんだ。『女子不登校事件容疑者
星木さんの遊園地デートは危険だからさ』なんて当人の前で言
えない。なまじ、チャラ男を倒してくれたり、フォローしてもらっ
た後なだけに余計。

しばらく無言でいると、七さんが溜め息をついて言った。

「まあ、理由はだいたい察しがついているけれど」

おおつ、さすが七さん！

「でも、さすがに無粋じゃない？」

おおぶ、さすが七さん。緩急の付け方が上手い。そして、返す言
葉もない。初デートを無断で尾行とか、無粋にもほどがある。お節
介だし、空振りだし、今のところ悪役は私だ。

それでも私は善意で行動していたし、貴重な休日が無駄にしてし
まったのだ。私だって少なからずイライラしている。

「で、でも、付き合って四日でデートっていうのはどうかと思っ
よ」

反論 否、難癖をつける。

「それとこれとは……っていうか、で、デートじゃないし」

……いや、ツンデレはもういいよ。私が辟易していると、

「……やっぱり、凜さんは星木さんのことが好
「きじゃない！ それはない！」

私が慌てて言うと、

「あ！ 慌ててる！ じゃあやっぱり」

「だから！ 違うって言うてるでしょ！…！」

感情の高ぶりを抑え切れず、私は勢いよく立ち上がった。

そして、この遊園地のマスコット シロクマ『ブラウニー』と思
い切りぶつかった。

「痛っ！」

私は盛大に尻餅を付く。二人は目を丸くしてこっちを見ている。
くっ、これでは結局スカートが汚れ……………ん？ ……スカート？
見ると、転んだ所為でスカートが捲れて、パン

「わああああ！！」

日直

「で、どんなパンツ穿いてたの？」

「……おまえはおっさんか……」

「おおう、テンション低いな」

翌日の教室。今はちょうど一時間目の後の休み時間だ。唯と二人、例によって七さんはいない。

「で、唯さんがいないのはやっぱり昨日の所為なの？」

「……おそらく」

昨日のパン……ブラウニー事件の後、七さんは硬い笑顔で『私帰る。後は二人でごゆっくり』とだけ言って、早足で帰り出した。さすがに、『二人でごゆっくり』とはいかないので、慌てて星木さんと一緒に追いかけた。が、以降は一切口をきいてくれず、今朝顔を合わせても、残念そうな、失望したような顔を向けてくるだけで、挨拶も返してくれなかった。

「まあ、いきなりパンモロじゃ誘惑してると思われても仕方ないんじゃない？」

「ゆ、誘惑………」

「元々人為さんは、凜が星木藍を狙ってるとか勘違いしてたんだろ？ じゃあ尚更じゃねえか。それは凜が……ってか凜の運が悪いよ」

「……………その通りで」

私はしよげながら、右肘の絆創膏をさする。

「ん？ それは？」

「例のクマさんにぶつかって尻餅ついたとき、ついでに肘も擦り剥いちやって」

「ふーん、まあそれはどうでもいいんだけど」

どうでもいいのかよ。擦り傷程度ではノーリアクションとは、さすがバスケット部のエースだけある（？）。

「どうでもいいんだけどさー」

「何？」

「今日、凜、日直じゃないの？」

唯の言葉にハッとして、ガタツと音を立てて立ち上がる。

日直。主だった仕事は日誌書きと黒板消し。基本的には二人ワンセット（名前順）なので分業するのだが、私のペアはアホ男子の中心を担うようなアホなので、仕事は全部私がやらねばならない。そう、つまり、

黒板消すの、忘れてた！

慌てて黒板に走り寄るが、無情にもチャイムが鳴り響き、時間に厳格な先生が教室に入ってきた。

そして、放課後。

「はあ……」

私は溜め息をつきながら、日誌を書いている。

今日は散々な一日だった。移動教室のことを忘れて遅刻したり、全然違う問題を答えたり、体育で唯の顔面にボールをぶつけてしまったりした。そして、日誌書きも遅々として進まず、休み時間内に書き上げられなくて現在に至るわけだが、

「……はあ、どうやって仲直りすればいいのか」

ということばかり考えてしまい、放課後になってから既に1時間以上が経過していた。

いつの間にか、教室からは人が消えている。無音の教室に、校庭にいる運動部の元気な声が響く。

ようやく日誌を書き終えた私は、大きく伸びをした。

何かよくわからない疲れを感じる。今日はお風呂に入ってさっさと寝よう。

そんなモアツとした思考に耽っていると、良い音を立てて教室のドアが開いた。

日直（後書き）

なんかノツてきたので最終回カウントダウンといたしますね。

あと6話くらいです。

信憑性0です。

誤字ゝなどありましたら報告頂けるとありがたいです。

言霊

「あ、先生」

「やあ、良真義さん。日誌書き、進んでいますか？」

教室に入って来たのは担任の先生だった。

「す、すみません、ちょうど終わったところです」

「そうですか。ああ、焦らなくていいですよ。いつまで経っても来ないので、心配で見に来てただけですから」

言って、先生は微笑む。

先生は今年で30歳、性格は穏やかで大人っぽく、授業も面白くてわかりやすいし、その上容姿も整っていて、愛用している黒縁眼鏡がよく似合うため、人気 特に女子からの人気は絶大で、かく言う私も、礼儀正しく折り目正しいこの先生には、尊敬の念を抱いている。

「……大丈夫ですか？」

「へ？」

「いえ、今日は朝から様子がおかしかったので、何か病気にでもかかっているのではと……」

「え、そんな、全然ですよ。げ、元気モリモリです」

言いながら、ラジオ体操の腕を曲げて上下に動かすアレをした。

……アホか。

「おや、その腕の絆創膏は？」

「……ああ、これはブラウニーにぶつかりまして」
「ぶ、ブラウニーさん？」

どうやら先生は地元遊園地のマスコットキャラは知らないらしく、顔に『？』を浮かべている。まあ、説明するほどのことでもないの
で、流そう。

先生は釈然としない表情を浮かべつつも、

「本当に大丈夫ですか？ 悩みがあるなら言ってしまった方が
いいですよ？」

と、尚も私を気遣ってくれた。

それだけで、私はほんの少し元気を取り戻せた。親身になってく
れたから、というよりは、私の生徒会長としてのプライドがこれ以
上先生を困らせるのを良しとしなかったため、どこから元気を創
って来た感じだった。

私はそれを使い、腹に力を込め、ハキハキと言った。

「いえ！ 本当に元気なので、心配しないで下さい」

どうせだからと、超ハイスピードにしてムツキンムツキンも続け
る。

私の様子を見て、さすがの先生も若干引いた。口角を不自然に引
き攣らせながら、先生は言う。

「そ、そうですか」

「そうです！ では、先生、さようなら！」

私は最後までムツキンしながら教室を出た。

ガラツと音を立ててドアを閉める。

……う、腕が痛い。

高速ムツキンの所為で腕がパンパンになった私。しかし、今朝よりは元気になった。元気と口に出すことで、実際に元気になる。成程、これが言霊か。そんな新発見も私に更なる力を与えてくれた。私は誰もいない廊下を歩きながら、1つのことを決意する。

明日、七さんとちゃんと話し合おう。

拳を握り、私は明日の戦いに想いを馳せる。

と、突然後頭部に衝撃が走った。

「がつ……！！？」

私はそのまま前に倒れ込む。顔を打った痛みを感じたのもつかの間、1秒後に背中に電流が走る。

「（スッ、スタン……が……）」

視界が暗闇に包まれた。

言霊（後書き）

あと5話です。

今のところ延長はありませんね。

誤字・脱字・誤表現などありましたら報告頂けると助かります。

7人

腕にビリビリとした感覚を覚え目を覚ますと、そこは廃倉庫だった。照明器具に照らされた倉庫内。私は冷たい埃まみれの床に仰向けで寝かされていた。

「キヤハハ！ 起こしちゃった〜？」

すぐ右隣りから聞こえた声に、私は顔を向ける。

そこにいたのは、私服で黒いサラサラの髪をサイドポニーにしている同い年くらいの美少女。見覚えは、ない。彼女はニタニタ笑って、私の右肘を突いた。

「いつ！」

腕に痛みが走る。とつさに腕を動かして彼女のツンツン攻撃を避ける。そこで初めて腕に手錠がかけていることに気付いた。

「なつ、何これ！？」

「キヤハハ！ 気付くのおっそ〜い！」

彼女は両手を打ち鳴らしながら、狂ったように笑う。身の毛がよ立つのを感じる。

直後、今度は私のすぐ左から呻くような声がした。仰向けのまま、首だけをそちらに向ける。

そこには、同じように手錠をかけられた制服姿の七さん。

そして、天井から垂れている鎖に腕を巻かれ、かろうじて床に付いている足も縄で縛られ、額から一筋の血を流した、やはり制服姿の星木さんがいた。

「七さん！ 星木さん！」

思わず2人の名前を叫ぶと、うるせー、と頭を蹴られた。私達がいるのはどうやら倉庫の隅らしい、とかズレた考えが頭に浮かぶ。

「おい、その辺にしとけ」

「だよだよ、次あたしの番でしょー！」

今度も左から、しかしかなり離れたところから、知らない声が聞こえた。見ると、やはり知らない、7人の美少女がいた。

……7人。

「……ああ、久しぶりですね」

突然、よく知っている声がした。やや、弱々しいがいつもの軽薄な口調。再度顔を向けると、星木さんが血を流しながらも、いつもの微笑を浮かべて喋っていた。

「本当に久しぶりです。引きこもり生活は楽しかったですか？」

彼の口から発せられた『引きこもり』という言葉。……じゃあ、やはり彼女達是不登校事件の……。

と、その時

「ほおおおしぎいいー！」

1人の少女が絶叫した。驚いて目をやると、彼女はなんと懷から抜き身のナイフを取り出した。

「何よアレ」

弱々しく、儚い感じの七さんの声がした。起きたのかと一瞬だけそちらを見るが、今はナイフ少女の方が問題だ。私は視線を戻すと、ナイフ少女が他の娘に組み伏せられていた。

……仲間割れ？

「離せ！ わたしがあいつを殺すんだ！」

「ふざけんな。あいつは全員で殺るって決めただろうが」

物騒なことを言い合う、美少女達。

「わたしがわたしがわたしが！！」

「ちっ！ おい、誰かスタンガン貸せ！！」

言い終わると同時に、前髪の長い美少女がスタンガンを差し出す。受け取った茶髪縦ロールの少女は、恍惚の表情を浮かべ、舌なめずりをして、躊躇なくナイフ少女の背中にスタンガン突き付けた。

7人（後書き）

……あと、5話以上かかります。

あれ？

おかしいぞ？？

どこを間違えた？？？

誤字・脱字・誤表現などありましたらご報告頂けるとありがたいです。

言葉使い

絶叫が廃倉庫に響く。私は80mほど離れた場所で起こっている凄惨な光景に、目が釘付けになる。

「……ひっ、ヒヤハハははは!!」

スタンガンを持っている、縦ロールが笑い声を上げた。悲鳴と交わり、不快な旋律となって響き渡る。私はあまりの気味悪さに、堪らず言葉を漏らす。

「……狂ってる」

「はあ？ 何言ってるんだし。全部そいつの思惑通りなんだろ」

私の隣にいたサイドポニーが星木さんを指差して、言った。

「え？」

「わざと挑発して、仲間割れを誘発させる。アハハ！ 上手いねー、何かのプロか、そいつは」

言葉は笑っているが、顔は憎悪に満ちている。私は、今日何度目かの悪寒に襲われる。

私が奮えていると、ふっ、という声がした。見ると、星木さんが笑っている。

「人の心を弄ぶプロは、てめえらだろうが」

その言葉使いに、私は驚愕する。

「アハハ！ 良いのかよ、素が出ちゃってるぜ？」

彼女の言葉に、星木さんはこちらをチラッと見た。

「……確かに良真義さん達の前でこんな言葉は使いたくありませんでしたが、てめえらに丁寧な言葉を使う方がありえねえよ」

彼はサイドポニーとは対照的に、顔は笑って言葉は怒っている。いつものエセ紳士っぽい喋り方はどうしたのか。しかし、続く彼の言葉で、その疑問は半ば解消される。

「てめえらみたいなクソ売女にはこれで十分だ」

今度は、言葉も表情も憎悪にまみれていた。特に『売女』という単語には、彼の持つありったけの憎悪が込められていたように感じた。

『売女』 女を、売る。

「……ああ、やっぱり知ってやがったのか」

いつの間にか、不快な旋律は止み、倉庫内は静かになっていた。あの7人 いや、1人減って6人も、こちらを見ている。

「知ってるぜ」

星木さんが言った。

「てめえらが援交してたことくらいな」

援助……交際？ まさか、うちの学校はまがりなりにも進学校だ。そんな話、この2年で一度も聞いたことはなかった。なのに、

「ちえっ、どっからばれたんだよ」

舌打ち混じりに吐き出された彼女の言葉は、星木さんの言葉を暗に肯定していた。

私が呆然としていると、彼女の呟きに星木さんが答えた。

「確かに、てめえらの隠蔽は完璧だった。どつかのオッサンとヤル分にはな。ただ、それで調子に乗ってやり過ぎたのが、てめえらの運の尽きだったんだ」

彼の言葉は徐々に震えていった。必死に怒りを堪えているのか、彼の唇から、血が流れ出る。

「クソ売女共が。俺のダチにまで手を出しやがって……！」

言葉使い（後書き）

あと5話くらいです

……そろそろカウントダウン辞めようかな。

……誤字・脱字・誤表現などありましたら報告頂けると助かります。

男の味方

「外霧巧そとぎりたくみって覚えてるか」

星木さんの言葉は小さく、私の隣のサイドポニーにしか伝わらない。

「ワタシ知らない。ねえ、外霧巧とかいうやつ知ってるー？」

サイドポニーは否定とともに、拡声器の役割もしてくれた。が、80m先の6人も、全員『知らない』と返す。
と、

「2年B組18番、てめえが引きこもりに追い込んだ男だろうが！
海耳未美！」

星木さんが、いつもの彼からは想像もつかないような叫び声を上げた。それに反応したのは向こうにいる6人の内の1人、帽子を被った幼い感じの少女だった。

「……あつ、アレだ！ あのデブオタメガネだ！ へえー、あいつ不登校になっただんだー」

海耳と呼ばれた少女がキャハハと笑う。それを見て、彼は更に叫ぶ。

「てめえが身体使って、金を貢がせたあげく捨てたから、あいつは引きこもりになっちまったんだろぅが！」

「エロい言い方やめろしー。ちよっと話しかけて、金くれって言

ただだけで、身体なんか使ってねーよ」

海耳はもう一度キヤハハと笑った。

「てかさ、あたしが親から金せびって来いって言ったら、あいつゲーム売ってきてさー。『ぼ、ぼくの宝物のゲームを売ったから、き、きみがぼくの宝物になってくれないか』とか、きつしよいこと言ってきてさー」

「アハハ！ 何それ、キモーイ！」

「でしょ、だから金だけ受け取って、『ごめんなさい、タイプじゃないの』って言ったら、あいつ泣き出してさー（笑）」

彼女達の不快な笑い声が倉庫内に響く。それを見て、星木さんは目を細めた。怒りが頂点を越したのか、むしろ冷静な声で彼は喋る。

「他にも、俺のダチがためえらの所為で引きこもりになった。でも、オタクとか気の弱い男子が引きこもりになるなんてよくある話だから、問題にすらならなかった。……うちの学校は放任主義だしな」

彼は下を向き、目を閉じる。そしてすぐに顔を上げ、言った。

「だから、俺がそいつらの、男の味方になるって決めたんだ！」

『女の敵』ではなく『男の味方』。

彼の言葉に彼女達は顔をしかめた。

「ハッ、そいつらの無念を晴らすために、あたしらを不登校に追い込んだ、ってか？」

「ああ。……てめえらに騙された奴らからも頼まれたしな。だから、てめえらみたいなクソ女と付き合った。あいつらの気持ちをてめえらクズに味わわせるためにな！！」

彼の言葉に、とうとう彼女達全員が激昂する。

「ーっ！ てめえ！」

「ふざけんな、星木い！！」

大量の罵声が飛び交う中、私は1人の少女を思い出す。

それは、星木さんの隣に座っていた美人系少女。彼が盾と呼んだあの娘も、彼女達と同じようなことをしていたのだろう。故の、盾扱い。

と、そこで1つの疑問が浮かぶ。

……あれ？　じゃあ、七さんは？

しかしまさかの勘違い

ガッ、という嫌な音を聞き、私は現実に戻った。

見ると、頭から更に血を流した星木さんと、その辺に転がっていた鉄パイプを持った、サイドポニーがいた。

「！！ ほし」

「藍さん！！」

私の言葉を七さんの叫び声が遮った。七さんは起き上がり、手錠がついた状態で星木さんに飛び付く。それを見たサイドポニーは、

「『藍さん』だつて、キャハハハハ！ 下の名前で呼んでんじやねえよ気色悪い！！」

言つて、鉄パイプを振り上げた。今度は照準が七さんに向いている。反射的に私は間に入ろうとするが、

「その辺にしとけ！ 独り占めは許さねえぞ！」

遠くから縦ロールがストップをかける。それを聞き、サイドポニーは舌打ちして数歩下がった。

私はとりあえず一息着く。が、七さんと星木さんはまっ先に互いの心配をしていた。それを見て、私は先程の疑問を打ち消す。きつと、2人は本当に愛し合っているんだ。裏も表もなく、純粹に。根拠はないが、私はそう思う。

そこへ、不粹な声が響く。

「ハッ、今度はそいつらがターゲットか？」

……ら？

「ま、何でもいいけどな。ただ、そいつらは可愛そうだぜ？ 現在進行形でめえと付き合っている所為で、ついでにまとめてわたし達に殺」

「ちよつと待って」

思わず縦ロールのセリフを遮る私。いやだっ

「私、星木さんの彼女じゃないんだけど！？」

私は渾身のツツコミを決めた。

……最初から疑問には思っていたのだ。何故私まで、と。本命が星木さんなら、七さんはともかく何で私まで、と。

しかしまさかの勘違い！？

すると、縦ロールが口を開いた。

「……ハッ、自分だけ逃げよう、ってか？ 甘えんだよ、ネタはちゃんと上がってたんだ」

「ね、ネタ？」

「しらばっくれんな、あんたら3人で遊園地に行ったんだろーが！ 楽しそうに3人仲良く、遊園地から出て来たところを見たやつがいたんだよ！」

……確かに帰りは3人一緒だったけども、何でよりによってその場面！？ しかも何だ『楽しそう』って！？ どこをどう見たらア

レが『楽しそう』に見えたんでせうか！！？

私は啞然として声が出ない。と、

「ハッ、認めたか」

認めてない認めてない！ 胸中で必死に否定する私。しかし、相手が完全に誤解しているため、どう否定すればいいかわからない。

「じゃあ、そろそろ殺っちまおうぜ」

縦ロールの言葉に、向こうにいる6人と、サイドポニーは様々な武器を構える。次いで、6人がサイドポニーの隣にまでやって来る。後腐れないように同時に飛び掛かってくるつもりらしい。

私はとっさに周囲を見回すが、ココは倉庫の隅なので、完全に囲まれている。星木さんは吊されているし、七さんは星木さんから離れようとしていない。

どうする、私！ このままでは勘違いで殺される！！

しかしまさかの勘違い（後書き）

あと5話（以上）です

そして、今回は某有名ライトノベルっぽく仕上がっております（タイトルの語呂と、本文の一箇所だけです）。

誤字・脱字・誤表現などありましたら報告頂けるとありがたいです。

武器

「「「じゃん、けん、ぽん!!」「」」

「「えー、負けー!?!」「」

「かつつたあああ!!!」

突如開かれたじゃんけん大会。既に3回戦目なのでやや緊張感が薄れているが、コレは誰が誰を殺すのかを決めるといふ物騒極まりないじゃんけんなのである。

「よし、決まったね。なっちゃんとしおりんはその生徒会長担当!」

「あー、せめてそっちの金髪がよかったー!」

「……わかった」

こうして、約5分の死闘の末、私達を殺す準備は整った。

その間、当然星木さんは動けないし、七さんは彼に抱き着いて離れない。

私は前後左右、天井や床にまで視線を巡らしたが、結局何の打開策も浮かばなかった。大声で助けを呼ぼうかとも考えたが、先程の怒鳴り合いから随分経つのに人っ子1人來ないのだ。おそらく意味は無いだろう。結局、誰かが助けに来てくれるのを祈るしかなかった。

……誰か、助けて!

しかし、そうそう上手く行くはずもなく、

「じゃあ、カウントダウン行くよー」

すっかりリーダー然とした縦ロールによる、無情なカウントダウンが響くだけだった。

「ちーん」

私は往生際悪く、再び周囲を伺う。しかし、打開策は見つからず、星木さんの服をギュッと握っている七さんが目に入るばかりだった。

「いーい」

私はしゃがんだまま目を閉じ、最後まで祈り続ける。

「
「
「
「
い
ー
ち
!」
「
「
「
「

誰か！

「ゼオオオ！」

助けて！！

その時、私の頭上を何かが通り過ぎた。

ガガガガガッ、という音と共に7つの呻き声上がる。私は驚き、顔を上げた。

星木さんの服を掴み、彼を武器のように振り回す七さんの姿が目
に映った。

「は!？」

どうやら七さんは、星木さんが吊されているのを良いことに、彼の服を掴んだまま両手を思いっきりスイングしたらしい(その前に、彼の縛られている両足を蹴り上げるといふ行程があつたようだが私は見ていなかった)。

結果、彼の身体は回り、彼の脚が向かつて来た7人の美少女を、文字通り一蹴したのだった。

ただし、彼女達は武器を構えていたため、当然そのうちのいくつかは彼の脚に当たり

「痛っ!!」

星木さんが叫び声を上げた。……いや、当たり前だろう。七さんは彼氏をどんな使い方しているんだ。

そう思い七さんを見ると、彼女は何の未練もなさそうに星木さんの身体を手放し、猛然と走り出した。

向かう先は、吹き飛ばされた縦ロール。走り寄った七さんは、その勢いのまま、縦ロールの頭を蹴り飛ばした。

「ぐえ!!」

短い悲鳴を上げ、完全に気絶する縦ロール。の、身体をまさぐり出す七さん。そして七さんは、ちよつと言いくいところから、鍵の束らしき物を引っ張り出して、言った。

「ピンゴー!」

武器（後書き）

あと3話です。

アレ？ 前回はあと5話とか書いたような気がします……。うん、まあよし。

あーん

鍵の束。といっても、鍵は3本しかなく、隠し持っておくためか、小さいリングに紐でそれぞれ結わえているという、何ともお粗末な作りだ。そのため、七さんが手錠を外すのに、10秒もかからなかった。

「凜さん、パス！」

言って、七さんは鍵の束を放り投げて来た。私は慌ててそれを受け取り、苦心して解錠する。

その間に、『ホゲツ！』というさつきと似たような声を聞いたが、私は解錠に必死だったので顔は上げなかった。

そして、ようやく手錠が外れ、軽い解放感を味わっていると、

「凜さん、コレもパス！」

という声と共に、また何か投げられた。ナイフだった。

「って、キャー!?!」

私はややオーバーにナイフを避ける。

「凜さん、ちゃんと取って！」

「無理だよ!?!」

と、ツッコミを入れてから気付いた。

……あれ、いつの間にか『凜さん』って。

コレが俗に言う吊橋効果か、と私が納得し、ついでに嬉しくなつてニヤニヤしていると、七さんが言った。

「凜さん！ 早く星木の拘束も解いて！」

……………『星木』？ 名字呼び？ 今までは確か『藍さん』だったはずなのに？ 何で？ 逆吊橋効果？

思えば七さんの行動は、さつきから不可解なものばかりだった。彼氏を武器代わりに使ったり、痛みを訴えている彼氏をあつさり離したり。……………あ、愛し合っているんじゃないの？

脳内が疑問符で埋め尽くされ、私はしばらくフリーズした。

「……………あの、良真義さん？」

頭上から降ってきた声に、私はハツとする。顔を向けると、星木さんが汗を流して苦笑していた。彼は言った。

「あいつの所為で脚が痛いので、早く拘束を解いてくれませんか？」

……………『あいつ』って、七さん？

またも私は困惑する。が、とにかく星木さんを助けるのが先決だと思い直し、七さんに渡されたナイフを拾った。

まず、足の縄を切る。次いで上を向き、腕の拘束を確認する。と、彼の腕にも手錠がかけられており、それを中心に鎖が巻かれていた。これなら、手錠を外せば鎖からも脱出できるかもしれない。しかし、どうにも位置が高すぎる。私が背伸びしても手錠までは届かない。どうしよう。

私が悩んでいると、

「良真義さん、鍵貸してくれませんか」

と、星木さんが言った。……いや、貸しても何も、どこに渡せば？ 私の表情から考えていることを読み取ったらしい星木さんは、更に言葉を続けた。

「ココ、ココ。口に、あーん」

………何故に笑顔？ 何となく下心が垣間見えたような気がしたが、私は『無言』で鍵束を差し出す。すると、彼はやや残念そうな顔を見せ、明らかにテンションを下げながら、口で鍵束を受け取った。

あーん（後書き）

あと5話以上……って、もういいよ！

本当にすいませんでした！

もう二度とカウントダウンなんかやりません！！

偽物

彼は鍵を1本口から出し、腕の力で身体を持ち上げた。彼はその鍵を右の穴に差し込み、何度かカチャカチャ音を立てたがどうやら違ったらしく、腕から力を抜き、床に足を着く。が、間を空けず、口内で次の鍵と取り替え、再チャレンジ。今度は合ったようで、数秒後、彼は鎖から解き放たれた。

「いやー、助かりました、良真義さん……ってあれ？」

私は既に星木さんの方を見てはいなかった。七さんのことが気になったのだ。

私は周囲に目をやる。と、気絶しているらしい美少女が、既に（最初のナイフ少女含め）6人にまで増えている。

そして今、七さんは2人の少女と相対していた。3人は廃倉庫の中央に、正三角形を描くように位置している。七さんはナイフ、2人の少女はナイフとスタンガンを、それぞれ所持しているため、全員軽はずみには動けず、膠着状態になっていた。

私はナイフを握り直し、加勢に向かおうとした。が、その肩を星木さんに掴まれた。

「待つて待つて、危ないですよ」

「でも七さんが！」

「大丈夫ですよ。2人くらいならあいつに任せましょう」

その言葉に、私は愕然とする。

「ま、『任せましょう』って、七さんは彼女でしょ！ 心配じゃ

ないんですか！」

私は怒りを込めて彼に問う。すると、彼は苦笑いを浮かべ、そして何故か大きな声で、言った。

「とりあえず、俺とあいつは付き合ってませんよー！」

彼の言葉に、

「ええっ!？」

「はあ!？」

「……!？」

私と、七さんと相對している2人の少女が反応した。どうやら途中から、私達の会話が聞こえていたらしい。故の、リアクション。その瞬間、

「はっ!！」

少年漫画然とした声を上げ、七さんはナイフを投げた。注意の逸れていたスタンガン少女に向かってナイフが飛ぶ。が、スタンガン少女は身体を捻り、ソレを避けた。

七さんの目が大きく見開かれる。その表情は、起死回生の策が失敗したことを如実に表していた。

それを見て、ナイフを持っている少女が、七さんへ向けて走り出す。しかし、七さんは未だにスタンガン少女の方を向いている。

やられる! そう思い、私は七さんの名を呼ぼうとするが、遅か

った。既にナイフの射程圏内。少女はナイフを大きく振り被り

その鳩尾に、七さんの後ろ回し蹴りが炸裂した。

「ぐはあっ!？」

まさかの反撃に、少女は成す術もなく吹き飛ばされた。理解できないといった顔の少女。その顔を、七さんは走り寄って蹴り飛ばした。

それで、その娘は完全に意識を失い、残る1人となったスタンガン少女は顔面を蒼白にする。彼女は、先程のありえない反撃を思い浮かべているのか、

「……………化物」

と、言葉を漏らした。それに七さんは言い返す。

「人聞き悪いわね。私は化け物じゃないわ。強いて言うなら偽物よ」

偽物（後書き）

『化物』に『偽物』

何のことか、分かる人には分かります（多分）

まあ、私の好きな作家が分かるだけなので、ピンと来なくても問題ありません

真逆の流れが蹴り飛ばすフリフリ

「『偽物』って……？ それに、何となくキャラが違うような…

…」

「それがつまり、『偽物』ってことでしょう」

「へ？」

それに星木さんは笑顔で答えた。が、何のことやらさっぱり分らない。彼は構わず七さんの方へ歩き出した。

「人為、代わろうか？」

「ん、そうね。お願い」

それだけの会話で完璧に意思を疎通させる2人。その息ピッタリさ加減はカップルのソレに見えなくもないが、話している空気は完全に他人のソレである。……じゃあ、本当に2人は付き合っていない？

77

星木さんはスタンガン少女に向かってゆっくりと歩を進める。七さんは左手を腰に当て、その場からは1歩も動かない。

真逆。

思い返せば、2人の行動はいつも真逆だったような気がする。喋っている時は黙って、動いている時は止まって。同じ行動なんて、イチャイチャしたり、互いを気遣い合う時くらいだったような……。でも、2人は付き合っていない………？

その時、スタンガン少女が声を発した。

「……………ほし……………ぎ……………あ、ああああ!!」

スタンガン少女が発狂して絶叫した。彼女はスタンガン突き出し、星木さんに向かって猛然と駆け出す。私は息を呑む。が、彼は落ち着き払って、シンプルに対処した。すなわち

少女の顔面を、蹴り飛ばす。

「おべつ!!」

言って彼女は良い感じにスリップ、宙に浮く。そして半秒後、後頭部を盛大に打ち付けた。

「……………う、うわぁ……………」

10秒にも満たないアクションだったが、私は十二分に衝撃を受けた。というか引いた。星木さんに。いくら何でも、女の子の顔面を。

「ふう……………」

星木さんは一息ついて汗を拭った。いやいや、おかしい。この場面でその爽やかさはおかしい! 人道的倫理的常識的におか

「あれ、凜さんどうかしました?」

どうかしてるよ! ただし私じゃなく星木さんの頭だけだね!

とは言えない。とりあえず、私は話を変える。幸い、聞きたいことなら山ほどあった。

「つていうか、2人は本当に付き合っていないんですか!？」

七さんがこちらを振り返る。私は一抹の望みを込めて、彼らの顔を直視した。この質問、私は『No』を期待していたのだ。が、

「あ、はい。付き合ってませんでした」

「うん、付き合った『フリ』」

何故か2人は清々しさを滲ませて言った。

「いや、いつ言い出そうか困ってたんですよ」

「そういう意味ではラッキーだったわ」

いや、ラッキーではないだろ！

というツツコミは置いといて、

「……じゃ、じゃあ、何で付き合ってるフリなんか!？」

色々乱れたけれど、気にしない。

「……何でって、ねえ」

「そうね、何でと言われても……」

2人は困ったように顔を見合わせ、言った。

「「……………流れ?」」

真逆の流れが蹴り飛ばすフリフリ（後書き）

良真義凜 名字は、真面目で善良で正義キャラの意味を込めて

人為七 名字は、『偽』で

星木藍 名字は、『せいぎ』で

城峰唯 名字は、『じょうほう』で

（ 城峰唯は一応、情報通キャラという設定でした ）

どうですか！ この私のネーミングセンスの無さ！ もう、誰か助けてください！

それと、今回のサブタイトルは今までで一番テキトーに決めました。

キャラなんて気にすんな

「ああ！ 流れね！ そっかぁ流れかぁ……って納得できるかぁ！ 省略し過ぎだろ！ ちゃんと一から説明せいつ！」

「り、凜さん！？ キャラが崩壊してるわよ？」

「知らん！ キャラなんか気にすんなぁ！」

「わ、分かりましたから。一旦落ち着きましよう、良真義さ」

「落ち着いてますう！ 世界一落ち着き払ってますう！ 気にしないでさっさと話して下さげほっげほっげ！」

……そういえば、息するの忘れてた。

「り、凜さん！ ちょっ、一回深呼吸しよ、スーハーって。スーッ、ハー」

スー、ハー。スー、ハー。私は七さんに言われた通り深呼吸した。

「……だ、大丈夫？」

「……うん、もう、大丈夫……」

ゆっくり呼吸し、息を整える私。と、2人の心配そうな顔が目に入った。……いけない、いけない、私を取り乱してどうするのよ。

「……良真義さん」

「大丈夫。それより、本題に戻ろう。……何で2人は付き合ってるフリなんかしたの？」

私は話を戻すべく早口でまくし立てる。ついでに、身振り手振りも付け加えて。

2人の表情は依然として変わらなかったが、それでも話してくれる気にはなったようだった。まず星木さんが口を開いた。

「えーと、最初から話すとなると一週間くらい前まで遡らないといけないといけないんですが」

「凜さん、屋上で彼と鉢合わせした日のこと覚えてる？」

私は即座に思い出す。星木さんと対面しようと思っていたが、人為さんが転校して来て断念、しかし偶然遭遇してしまったあの日だ。

「あつちでぶっ倒れてる茶髪の子をふったあの日ですよ」

星木さんは笑いながら指を差した。指の先には、真っ先に気絶させられた茶髪の少女が倒れている。

「はっは、ざまあないですね」

心底楽しそうに笑う星木さん。……彼女達に対しては本当に容赦ないなあ。だんだん慣れてきた私は、それをスルーして、人為さんに先を促した。

「それでね、あの日屋上で、私は彼を一目見て思ったの」

……………おお？

「そうだな、俺も一目見て思った」

おおおおお！？

2人は顔を見合わせて笑い合っている。

何コレまさかここへ来て、まさかまさかの大どんでん返し！？
実は付き合ったフリというのも嘘で、実は実は、一目惚

「こいつ、悪い奴だなー、って」

「……………は？」

偽ツンデレ

呆然とする私をよそに、二人はペラペラ喋り続ける。

「なんと言いますか。嘘をついてる者同士、何かを感じたんですよ。俺はほら、糞女子と接していたわけですから、そういうアンテナは敏感で」

「私の場合は普通に長年の勘ね。まあ、結局私達二人とも悪人じゃないかったけど」

……普通に長年の勘？

「いや、人為は悪人だろ」

「えー、ただキャラ作ってただけよ？ 普通の世間一般の女子高校生じゃない？」

普通……？

「ツンデレキャラをあのクオリティで再現できる奴を普通の女子高校生とは呼ばない。詐欺師と呼ぶ」

星木さんの的確なツツコミに、七さんはややムスツとした。

「そんなこと言ったら星木だって相当じゃない。笑顔で女の子蹴り飛ばす男子高校生なんて普通じゃないわ」

「そうだな、俺は正義の味方だからな」

正義……？

「……いや、正義の味方でもないわよ」

今度は七さんが、呆れたようにツツコんだ。色々な意味で七さんに同意だ。

「てか、あいつらはいいいんだよ。特別なの。特別なクズなの」

星木さんは弁解(?)を口にする。と、

「ふふふ。特別なのは、あの娘達だけかしら」

七さんが底意地の悪そうな笑みを浮かべ、言った。それに星木さんは、

「っ!?!? おまつ……（お前やっぱ気付いてたのかよ）」

思い切り狼狽し、急にヒソヒソ声になった。

原因はどう考えても先程の七さんの意味深長なセリフだが、私には何のことかさっぱり分からない。

「（当たり前じゃない。だからあんなこと言ってあげたのに）。あなたに度胸があればなー!」

「（いやいや、無理だったって。あれはあれで正解だったんだよ）」

「はあ、情けないわ。それでも男?」

「うるさい、偽者」

「あら心外。せめて『偽ツンデレ』と言ってほしいわ」

……何やらヒートアップし始めた。

「変わんねえよ。『偽者』で十分だったの」

「ふうん。いいんだ、そんなこと言っちゃって。りっんさ〜ん、あのね」

「申し訳ございませんでした!」

「ふっ、分かれば良いわ」

収束した……らしい。

「……それで、似た者同士って分かって、どうして付き合うフリを？」

二人に任せていたらいつまで経っても話が進まないようなので、仕方なく私が話を元に戻す。

「ああ。いや、だからつまり俺は糞女狩りのつもりで言い寄って」

「私は胡散臭い彼の情報を得るために承諾したのだけど」

「付き合ってみたらそんな悪い奴でもなくて」

「逆に付き合うフリを辞めづらくなってしまったというわけよ」

胸を張る二人に、私は

「……はあ、そうですか」

としか言えなかった。

全身を倦怠感が包む。なんだか、一刻も早く帰って寝たい気分だ。私は重たく感じる脚を前へ進める。

同時、首にナイフを突き付けられた。

偽ツンデレ（後書き）

『男の味方』『偽ツンデレ』

これらを思いつき、使ってみたなー、とか思って、この話が誕生しました。

バリバリ見切り発車だったのですが、終われそうで何よりです。

あとタイトルは、『嘘嘘』にしようと思っていましたが、何となく嫌で、字面が似ている『虚虚』にしました。

『嘘嘘』にすれば良かった。

けーせー再逆転

首に、ナイフが突き付けられる。私が右手に持っていたナイフを、手ごと掴まれて。

完全に気を抜いていた。そのため、彼女　確か、『なっちゃん』と呼ばれていたサイドテールの美少女が起き上がったことに、私達は全く気がつかなかった。

「キャハ。けーせー再逆転。ダメだし、とどめはもつと念入りに刺さなきゃ」

「……そうね。これは私のミスだわ。壁にキスしたままピクリともしないから、てつきり逝っちゃったものばかり」

「残一、念、逝って帰って来ちゃった。てめえらが長話してる間にー。ほら、しおりんも起きて」

彼女の言葉に反応して、倉庫の隅に転がっていた、もう一人の美少女が顔を上げる。

「……そうだ。確か『なっちゃん』と『しおりん』は私を殺す担当だった。私達が転がされていたのは倉庫の隅。一番右端の私の担当ということは、7人の中で彼女達が一番壁際にいたということ。だから多分、彼女達は蹴り飛ばされた時、壁に頭を打ち気絶したのだ。さっきの、星木さんを解放する間に七さんが五人もの女の子を倒したということに、私は若干の違和感を感じていた。しかし、二人が頭を打っていて、実際は三人しか倒していなかったのなら納得がいく。」

つまり、彼女達は七さんにとどめを刺されていないのだ。

『しおりん』と呼ばれた黒髪パツツン美少女が近づいて来る。私はとつさに腕に力をいれる。が、ほとんど動かせない。しかも、ナイフを持った手を被うように掴まれているため、ナイフを離すこともできない。万力に挟まれているようだ。明らかに普通の少女の力ではない。

「さつてと、話はだいたい聞かせてもらったわ」

「なっちゃん、私あんまり話聞いてない」

「……しおりんうるさい。茶々いれないでよ」

「むー、何か不平等」

「いいから黙ってててば」

わーわー口論が始まった。緊張感に欠ける。

と、星木さんが静かに右足を一步

「つと、動かないで、星木藍」

「そっちの女も」

彼女達の牽制を受け、星木さんは仕方なく足を戻し、七さんは眉をひそめた。

「キャハ、ちよつとでも動けばこいつの喉をかつ切るよ?」

『なっちゃん』のセリフに全身が栗立つ。今更ながら、嫌な汗が吹き出す。と、星木さんが叫んだ。

「ふざけんな! 話を聞いてたんなら分かるだろ! 良真義さんは

「分かつてる、この女は本当に関係ないらしいねー」

星木さんの言葉を遮って『なっちゃん』は言った。しかし、星木さんは間髪いれず再び叫ぶ。

「じゃあ良真義さんを離せよ！ とつとと俺を殺ればいいだろ！」

声を荒げる星木さん。対照的に、『なっちゃん』は静かに言う。

「そうだね。確かにその通り」

そして、『なっちゃん』は私の首にさらにナイフを近づけた。

「え？」

「けど、やっぱこいつは殺すから。だって、こいつのこと好きなんだろ、星木さん？」

けーせー再逆転（後書き）

あと三話でしめ（られるように頑張り）ます。

と、いいですか、あんまり間が空かないように頑張り『たい』です。

誤字・脱字・誤表現などありましたら報告いただけるとありがたいです。

「……………へ？」

何を、言っているの？

「『へ？』じゃないし。いつまで猫被ってる気だよ。全く、あつちの偽ツンデレ以上に厚いツラの皮だよなー、生徒会長ちゃん」

だから、何を言ってる？

「まあ、あつちの偽ツンデレのが詐欺師としては上だけだね。完璧騙されたし。まさか、付き合ってる相手を武器として扱うなんて思わないもん」

「みーちゃんにナイフかわされた後の表情も、あれ演技でしょ？ 凄いよね」

キャハハと笑う彼女達。その振動でナイフが若干皮膚を裂き、首筋から少量の血が流れ出した。しかし、そんなことは気にならない。

「……………ど、どういう？ 星木、さんが…………？」

「は？ だからもういいって。かまととぶんなくて。気付かねーわけじゃないじゃん。言葉遣いが明らかに違ってんだから」

言葉……………遣い？

「あんたと他の奴らに対しての言葉遣いの違いだよ。星木藍、ウチらには雑な言葉遣いなのに、あんたにだけは敬語じゃん」

「……………それは、あなた達だけ」

「そっちの女にも敬語なんか使ってないし。てかあいつがウチらの学校で先コー以外に敬語使うのはあんただけ」
「辞めるー!!」

怒鳴り声。もうかなり聞き慣れた、その声。見ると、

顔を真っ赤にして下を向いている星木さんの姿が。

「は？ え、もしかして？」

「隠してた、つもりだったの？」

『なっちゃん』『しおりん』の問い掛けに、星木さんは答えない。

「ぷっ。アハハハハ!! えー、嘘、マジで!？」

「隠せてたの？ あれで？ 気付いてなかったの？ほんとに？」

『しおりん』が本気で驚いたという顔で私に問い掛けてきた。応えることは、できない。顔が、火照っていくのを感じる。

「キヤハハハ、かつわいー! 二人して顔真っ赤にしちゃってさ。

キヤハハハハ!!」

「そーだ! 告白させない? 告白」

「いいね、それ! ねえ、星木君。今からこの娘に告白してよ。しないと殺しちゃうよ? キヤハハハハハ!!」

「アハハハハ!!」

哄笑が、響く。

「ほら早くコケれよ。早くしないと、ぶつさり殺っちゃうよー？」
「ほらほら、は・や・く・し・な・い・と」

『しおりん』が右肘のかさぶたに触れる。そして、ニンマリ笑って、それを剥がした。思い切り。

「うあっ……………！！」

皮膚ごとかさぶたが引きちぎられた痛みに、さすがに悲鳴が漏れた。それに反応して、星木さんが顔を上げる。

「良真義さ」

「来んな！ 傷つけられなくなったら、さっさと告白しろよ」

「アハハ、次はこの傷を広げるからね。ブラウニーの傷をブロードウン アハハハハハ！！」

不快な笑い声。痛む腕。羞恥で赤い顔。噛み締められた歯。

私は絶望感に耐え切れず、泣きそうになる。

その時、倉庫の扉の向こうから、カランツ、という良い音がした。

ミサイルキック

『カランツ』という、立てかけてあった鉄パイプが一本だけ倒れたような音が、した。それは、自然現象によるものとは思えない、どこか人為的な、異様な音だった。

全員の視線が扉に向けられる。

「だ、誰だ！　そこにいる奴、出て来い！」

ドモリながら怒鳴る『なっちゃん』。どうやら相当に焦っているらしい。無理もない。

だってそこに人がいたのなら、この状況を見られていたというわけ、それは彼女達にしてみれば、人の首にナイフを宛がいながら高笑いしていたのを見られていた、ということなのだから。

「出て来いっつつてんだよ！！」

『なっちゃん』が再び怒鳴る。その瞬間、

私の右手を掴んでいた、彼女の握力が弱まるのを感じた。

彼女の意識は完全に扉に向いていたのだ。ここしかない、と私は思う。そして意を決し、

私は『なっちゃん』の手に思いつ切り噛み付いた。

「いっつ！！？」

『なっちゃん』が苦痛に満ちた声を上げた。私も顔を動かしたために首をさらに切ったが、声は上げない。むしろ歯を食いしばるイメージで、彼女の手を噛むことに専念する。悲鳴と共に彼女の握力が弱まっていく。が、

「てめえ、何してんだ！！」

怒声を上げながら『しおりん』が即座にフロアにまわった。私の髪を引っ張り、『なっちゃん』の手から私の口を引きはがす。しかし、既に右手に拘束感ほとんど無い。いくら非力な私でも、これなら手を開くことはできる。

そして手を開けば、ナイフは落ちる。

「！！！！」

髪を後ろに引っ張られていたため、彼女達の驚愕している表情が偶然にもよく見えた。『カシャンッ』と良い音を立てて、ナイフが床に落ちる。直後、

星木さんと七さんによるミサイルキックが『なっちゃん』『しおりん』の顔面に炸裂した。

勢いよく後方に吹き飛ぶ美少女二人。しかしここは倉庫の端。つまり後ろはすぐに壁。そして彼女達は『ゴンッ』という無骨な二重奏を奏でて、埃まみれの床に沈んだ。

「……………お、終わった〜」

危機を脱し、私はへなへなと汚い床に座り込む。と、

「大丈夫？ 凜さん」

七さんが私の左隣りにしゃがみ込みながら言った。

「うん。首をちょっと切っちゃったけど、何とか無事だよ。助けてくれてありがとう、七さん」

「どういたしまして」

私も七さんも、自然に笑みがこぼれた。そして、私はもう一人の命の恩人にもお礼を言うべく、後ろを向く。

「星木さんも、ありがとうございます　ってあれ？」

見ると、星木さんが何故か後ろを向いて立っていた。どうしたのだろう？　と思った二秒後、私は思い出す。思い出しついでに、再び顔が熱くなる。そういえば、さっき

その時、倉庫の扉がガラガラ音を立てて、開いた。

黒縁眼鏡の先生がそこにはいた。

ミサイルキック（後書き）

『ミサイルキック』というのは、プロレスのコーナートップからのドロップキックのことです。

だから厳密には間違った表現なのですが（コーナーありませんし）、何かこう、斜め上からのキックを表現したかったのです（どんだけ飛ぶんだよって感じですが）。

……嘘です。

『ドロップキック』より『ミサイルキック』の方が響きがかっこよかったというだけの理由で使用しました。

申し訳ありません（謝）。

今度こそ終わり

月明かりをバックに、先生が立っていた。

「あ、先生」

「よ、良真義さん。それに人為さんに三組の星木君。な、何なんですかコレは」

かなり困ったような表情で、先生は倉庫内を見回す。美少女が色々なところでぶっ倒れている、ナイフやスタンガンが転がっている、倉庫内を。

「……何なんですか、これ……」

……いや、何なんだと言われても。

私達は完全に被害者なのだからありのままを話せば良い。しかし『男の味方』や『偽ツンデレ』をどう説明すればいいのかわからない。特に『偽ツンデレ』なんて七さんの内面にあまりに深く関わっているため、私が勝手に説明していい事柄とも思えない。どうしよう。

妙案が思い浮かばず、私はチラリと七さんを伺う。と、

七さんはレースの可愛い白い上品な感じのハンカチを顔に当て、すんすんと変な音を発しながら肩を震わせていた。

って、ハンカチ!?

「！　どうしたのですか、人為さん」

先生が気遣わしげな顔でこちらに駆け寄ってくる。人為さんはいつの間にか私と同じく、完全に床に座っていた。他人の庇護欲をそそるようなボーゾングだった。

「……い、いえ。先生が、来てくれて、安心してしまつて」

「一体、何があつたのですか？」

そして七さんの創作ストーリーが始まる。

それはもう設定から違つていて、私と星木さんは付き合つているということになつていた。そのことに嫉妬した美少女達は私達をさらうという強行手段を取り、七さんは不運にも巻き込まれた美少女という役割だった。

設定から既に容認できない話だったが、私が訂正しようとしたら床に落ちていたナイフが何故か飛び跳ねるという不可解現象が起こり、黙らざるをえなかった。

五分ほどで話は終盤に差し掛かり、結局運と偶然に助けられ狂乱する少女達を退けることに成功したということで終わった。

「それから先は先生も見ていらつしゃつられたのでしょう？」

「え、ええ。良真義さんが捕まつてしまつていたあれですね」

「……はい。親友の良真義さんを失つてしまうのではと、とても恐ろしく……」

言いながら身震いする七さん。何だかむしろ、素直に感心したくなるような演技力だった。

「というか先生。何で、もっと早く入ってきてくれなかったんですか？」

これは星木さんが質問した。先生は頭をかきながら答える。

「それが、イマイチ状況が理解できず警察や学校に連絡すべきか迷いまして。その内に、立てかけてあった鉄パイプを倒して、いよいよパニックになってしまい、出て行くのが遅れてしまったのです。申し訳ありません」

予想以上に予想は的中していた。

「あ、そうだ。警察と学校に連絡しないといけませんね」

そう言つて、先生は私達から少し距離を取り、電話をかけ始める。

今度こそ終わった。私は安堵の息を吐く。色々あつて緊張しっぱなしだったが、それもようやく解ける。ついでに腕の痛みも戻って来た。

「いゝっだあゝ!!」

七さんと星木さんが驚いて顔をこちらに向ける。私も自分の腕を見遣る。そして、今更ながら右腕が真つ赤なことに気付いた。

「大丈夫、凜さん!？」

「いゝっ、ぐ、だ、大丈夫……」

丸つきりやせ我慢だった。ものすごく痛い。ぶ、ブラウニーめ……。筋違いの恨み言を心の中で漏らす。

その時、ある考えが電光のように頭に浮かんだ。

私は腕の痛みを再び忘れる。

「先生。先生も犯人ですか？」

今度こそ終わり（後書き）

はい、終わりません。

後書きにサブタイトルまで使ったの終わる終わる詐欺でした。

いや、最初から詐欺るつもりだったわけではなく、本気で二、三話で終わらすつもりだったのですが……。

ダメでした。

仕方ないので、今度はちゃんと明言します。

あと、三話です。

推理編

「先生もこの娘達とグルなんでしょう？」

ちょうど電話をかけ終えた先生が、振り向く。

「……な、何を言っているのですか？ 犯人？ グル？ 一体何の
」
「やっぱりか」

先生の言葉を遮るように、星木さんが言った。私は少しだけ驚く。

「……じゃあ、星木さんもあの事に気付いて……」
「いえ、何となく怪しいと思っていただけです！」

……ああ、勘か。イマイチ格好がつかない。せつかくの緊張感が
台なしになった。

「ち、ちょっと待って。二人共何言ってるの？ 犯人？ 先生が？」

七さんが困惑した顔で私達に聞く。それに私は、逆に驚く。

「あれ？ 七さんは気付いていなかったのですか？」
「気付いてって……。いや、だって、凜さんは先生のおかげで助か
ったと言っても過言じゃないのよ？ 偶然だったけど。それを」

七さんが喋っている途中だったが、私は思わず呟く。

「……七さんって、意外と義理堅いんですね」

「なっ……!!」

「いやー、ただあの先生が好みのタイプだったってだけだと思えますよ」

「ちよっ……!!?」

「え、そうなんですか? 七さんって年上好き?」

「ええ、遊園地で言っていました」

「ほしっ……!!」

「そういえば、何で二人は遊園地に行ったのですか? 付き合っているフリなら、そこまでする必要はないと思いますけど」

「あれは最終確認みたいなもんですよ。学校では良い娘に見えても、遊園地みたいな特殊なシチュならボ口を出すかと思っ」

「シャラップ!!」

七さんが大声で、しかも何故か英語で、私達の会話を中断させた。

「そんな話どうでもいいのよ! どうしたら先生が彼女達とグルッてことになるのか、今はそれでしょ!」

床で気絶している美少女達を指差し、七さんが大声でまくし立てる。さつきまでの上品さはどこへやら。つまり、あれも『偽』ということで。

「七さん、落ち着いて、よく考えて下さい。まずここはどこですか?」

「し、知らないけど。……どこかの倉庫じゃない?」

「そうです。加えて言えば、大声出しても誰にも気付かれないくらい人気のない場所にある、倉庫です」

言われてようやく気付いたようで、七さんは先生の方に顔を向けた。

「……先生、何でこんなところにいるんですか？」

当然の疑問に、しかし先生は答えない。答えない先生に、私は更に問い掛ける。

「私の予想では、ここは学校から一キロ半くらい西に行った倉庫街だと思いますが、違いますか？」

先生は、やはり答えない。

「じゃあ先生、今は何時ですか？」

「……………七時、二十五分」

「まあ、そんなところでしょね。改造スタンガンでも、二時間気絶させるのが精一杯でしょうから」

予想通りだ。

「先生、何故こんな所にいるのですか？ この時間では、親から電話が行った可能性も低そうですね？」

すると、今度は返答があった。

「い、いやですね。早とちりですよ」

「早とちり？」

「そうです。私がここにいるのは、彼女達を付けたからですよ。良真義さんが教室を出たすぐ後に、廊下から悲鳴が聞こえたので、見ると、複数の少女に良真義さんが襲われていて、しかし、襲ってい

る少女達は武器を手にしており、その場で取り押さえるのは辞めて、後を付けたのですよ。勿論、全て良真義さんの身の安全を」

先生は、早口で喋り続ける。

……私、悲鳴なんて上げたっけ。スタンガンの襲撃にあった前後は、記憶がかなり曖昧である。実は先生との会話の内容もテキストだったりする。

私が記憶を手繰ろうと頑張っていると、先生が満足げな笑みを浮かべているのが見えた。ので、

「そうですか」

私も笑った。

「先生、さっきと言ってることが矛盾してますよ」

先生の笑顔が、凍りつく。

「先生、さっきは『状況が理解できず』とか言っていましたよね。しかし、私が連れ去られたのを見て、そこからずっと付けていたのなら一部始終見ていた筈です。それで、把握できなかったのですか？」

先生は口をパクつかせる。

「ずっと見ていたのに、今頃連絡というのもおかしいです。私達が気絶している間、先生は一体何をしていたの」

と、

「ふっ、ははハハハ！ 御明察ーうー！！」

先生が、眼鏡を外しながら、倉庫を揺らすほどの、粗雑極まりない大声で、私の台詞を再び遮った。

「「「！？」」「」」

先生の変貌ぶりに、私達は驚く。

「あーあ。騙し通せると思ってたのによ。やっぱり登場のタイミングミスったよな。運悪く鉄パイプ倒しちまったのが原因だよな、絶対」

がらりと変わった口調。眼鏡まで外したソレは、もはや私達の知る先生ではなかった。

私は気圧される。ギャップが恐ろしい。しかし、私は言葉を発する。ここで退いたら、場の主導権を持つていかれそうな気がした。

「な、何を言っているのですか？ 鉄パイプを倒したのは運が悪かったからじゃなく、『しおりん』の言葉に動揺したからでしょう？」

「あゝん？」

ひっ……！！

怖い。情けない声が漏れそうになる。でも、ダメ。頑張らないと。数的には、こちらの方が有利だ。恐れることはない。

「……さ、さつき『しおりん』は私の傷をいじりながら『ブラウニーの傷』と言いました」

私は痛む右肘をチラと見遣る。

「でも、彼女達は私達が遊園地から出て来たところしかしらなかった。つまり、私の怪我とブラウニーの関係は知らないはずなのです。ということは誰かに聞いたということ。そして」

私は息を吸うためにワンテンポ置く。

「そして、私が『ブラウニーにやられた』と言ったのは、先生、あなただけなのです」

推理編（後書き）

今回は推理編でした。

雑な推理でごめんなさい。

そして実はこの話、とくにできていたのですけれど（2400文字だし）、大好きな作家先生の最新作を読んだり、ドラツダラしている間に、丸一ヶ月経ってしまいました。

すみませんでした！

というわけで、あと二話です。

黒い突起物のついたアレ

「私が最初に引つ掛かりを覚えたのがこれです」

そう、この右肘の痛みが、もはや先生とは呼べないこの男を疑うきっかけとなった。

「私は今日一日、ずっとぼーっとしてましたし、ブラウニー事件は……その、内容が内容でしたから、生徒の中では唯にしか喋っていません。その時も確かブラウニーとは言わず、『例のクマさん』と言っていました。つまり、この傷とブラウニーが関係しているのを知っているのはあなただけで」

「ちよつと待てよ」

奴が四度遮る。

「ブラウニーの話は、あいつら女共が盗み聞いていた可能性もあるだろ」

奴が正論を吐く。しかし、そんなもの痛くも痒くもない。所詮はきつかけなのだ。それに、

「聞いて、いなかったのですよね？」

「……ふんっ、まあな。どうやらあいつら、お前には全く興味がなかったらしい」

そう、彼女達にとって私や七さんはおまけに過ぎない。本当の目的は、星木さんだけ。

「車の中で話してやったんだが、まさか言っちゃまうとは思わなかったぜ」

「……車」

「ハッ、白々しいな、どうせわかってたんだろ？」

「……まあ、はい。人目を引く美少女が八人も、しかも気絶した私達を抱えて、徒歩で移動するのはほぼ不可能。だから、移動には車を使っただけ」

そして、車の運転には大人が必要。

これも奴を疑った要因の一つだ。当たり前過ぎて推理でも何でもないが、当たり前過ぎて気付かない、ということはある。加えて、さっきは窮地を脱した直後で気が緩んでいた。気付かなかった可能性は高い。やはり、奴を疑えたのはブラウニーのおかげなのだ。

「ハッハッハッ！ よく分かったと褒めてやるぜ。まさか良真義にばれるとはな。ばれるとしても人為か星木だと思ってたぜ」

「気安く名前呼ぶな、死ね」

七さんが嫌悪感MAXで吐き捨てる。……ああ、思いつ切り騙されたことが原因か。そういうプライドは高そうだしなあ。

言われた奴は、しかし怒るでもなく、顔を下に向け、くつくつと笑っていた。

「……ついでだ、もう全部ネタばらししてやるぜ」

奴は、顔を上げるついでに、両腕も大仰に掲げる。そして、言った。

「俺は美形教師、ぶっ倒れてる女共は売女。俺達は共犯。さて、そこから導き出せる答えはなーんだ？」

「「！！」」

「まさか！ あんたが売春を斡旋」
「そして！」

奴はもう一度顔と腕を下げる。それはまるで、腕時計で時間を確認しているような。

「俺はさっき誰に電話したでしょうか？」

「「「！！！！」」」

「アッハッハ！ 流石にガキだな。俺が時間を稼いでいることにも気付かないとは」

奴は高らかに笑う。……え、ちょっと待って、三対一で、数的には、こちらの、方が

「なあ、誰に電話したと思う？ 答えは俺の売春斡旋の元締めの入れ墨付きの危ない人達でしたーアハハハハ！！」

危ない、人。それはつまり、ヤクザとかそういう。
途端に私の身体は震えだす。

待って、入れ墨？ 数的有利が、ヤクザ？ 床に落っこちているナイフ、凶器？ 三人、たったの？

殺され

「凜さん、しつかり」

七さんに手を掴まれ、私は正気に戻る。前を向けば、星木さんが私達を庇うような位置に移動していた。

「……………あ」

変わらず冷静な二人を見て、私は体の震えがいくらかおさまるが、

「先生、あんたが売春を斡旋していたのか」

今度は、背筋に悪寒が走った。それは、驚くほど冷たい声だった。誰が言ったのか理解するのに、数秒を要するほど、冷たい、冷たい、星木さんの声。

「あ？　もしかしてキレてんのか？　俺が全部悪いんだー、みたいな？　アッハハハ！！　おいおい、誤解だぜ」

明らかに雰囲気が変わった星木さんに対しても、奴はあくまで軽薄に応じた。

「確かに唆したのは俺だが、あいつらもノリノリで売春に励んでたぜ？　実りの良いバイトだ、つつつてよ。ほらな、以外と俺は悪くないんだよ。ハハ、悪いのはあいつらとあいつらの頭」

「黙れ、クソ野郎！！」

星木さんの怒号が倉庫に反響する。私からは彼の顔は見えないが、それでも彼の怒りはヒシヒシと伝わって来る。

「おいおい、そんな口きいて良いのか？ 何ならもう一度連絡とつて、早く来させることもできるんだぜ？」

「その隙にぶっ殺してやる」

物騒なセリフ。しかし、奴の笑みは崩れない。

「ハッ、残念でした。こっちには『無線』何て言ってもんもあるんだよ」

奴は懷から、真っ黒い物体を取り出し、

「あ、あー。あと何分で着きますかー？」

それに向かって声を発する。と、

『こちら七翼会、もう一、二分で到着する』

という返事が返ってきた。間違いなく無線であった。そして、今の『七翼会』というのが元締のヤクザ屋さんで、

「あと一、二分だってさ！ アハハハハハハ！！」

一、二分で彼らはやって来る。

「アハハ、どうなんのかなー？ 全員美形だし、やっぱり奴隷市行きかなー！ 若い健康な内臓は高く売れるって聞くしなー！ 何に

せよ、俺には今までの数倍の仲介料が入るわけでー、……アハ、アハハ、アハハアハハアハハハハハハハハハハ！！」

哄笑が、絶望感を増大させていく。しかし私は、再び震え出しそうになるのを必死で抑える。だって、

「あんたをぶっ飛ばすのに、一分もいらねえよ！！」

言つて、星木さんは真っ直ぐ奴へ向かって走り出す。

そうだ、七さんと星木さんは諦めていないのだ。二人が諦めていないならば、私も震えてなんかいられない。信じるのだ。二人を。七さんと、星木さんを　！！

「ぐあつ、脚がああ！！」

と、星木さんが突然脚を押さえ呻き出した。私はつい、

「……………は？」

と、鼻白む。

黒い突起物のついたアレ（後書き）

いつぞやのジャンル変えの話は、前回の『推理編』を見越してのものでしたのですが、推理なんて呼べる代物ではなかったので、辞めました。

それにしたって、これ学園ものか？ という疑問はあるのですけれど、まあ、もう、終わりますし、大目にみて下さい。

あと一話です

嘘

「藍さん！ 大丈夫」

「来るな、七！！……あいつは、あいつだけは、俺がやらなきゃいけないんだ！！」

「アハハハハ！ どうした、既に満身創痍じゃねえか！！」
「……………」

七さんが何故か星木さんを名前で呼んだ。

星木さんは、どういいうわけか脚を抱えながら、少年漫画にありがちなセリフを口にした。

奴はその星木さんに向かって『満身創痍』とか言った。

「あんたなんか、私がぶつ殺してやる！！」

七さんが声を荒げる。まるで、星木さんが使いものにならないかのような言い草。

「おいおい、状況が見えてねえのかよ。もう、俺が一声発すれば、物騒な連中が乗り込んで来るんだぜ？ そんな口利いていいのか？」
「あんたなんか…………！」

「…………七、お前はそこで、良真義さんと一緒にいろ。こいつは…………俺、が…………」

星木さんが、相当なスローペースで立ち上がる。『これだけでやつとですよ』と言わんばかりの挙動。すると、

「ハハッ、無理すんなよ。立ち上がるだけで精一杯じゃねえか！何ならこっちから近付いてやろうか？ ほら、掛かってこいよ」

言いながら、奴は星木さんに近寄っていく。

「.....」

.....何、この茶番。

え、何？ 何であいつこっちに来てるの？ 『満身創痍』って、
.....確かに星木さんは（七さんの所為で）脚を切ったか何かしたみたいだけど、さっきは飛び蹴りしていたし、その前には女の子の顔を蹴り飛ばしていたし、立ち上がるだけで精一杯とか有り得ないよ！？ というか、七さんは何でまたキャラ作ってるの！？ もうバレバレだよ！ 周知の事実と言っても過言じゃないよ！！

と、思ったけれど、私はすぐに思い直す。

そういえば、結局奴は一部始終を見てはいなかったつけ。

そうだ、よくよく考えたら、奴は何も知らないはずなのだ。倉庫に入ってからヤクザを呼んだくらいなのだから、どう考えても奴は、私が『なっちゃん』に捕まるより前のことを知っているはずはない。つまり、奴が知っている情報は、星木さんが私をむにやむにやくらいなのだ。

七さんは奴に乱暴な言葉を使ったが、元々『ツンデレ』のフリをしていたため、恐らくバレていない。普段はツンツンして好きな相

手にだけデレる、というツンデレキャラの許容範囲内の行動だろう。

何も知らない。

だからこそその二人の行動。星木さんは満身創痍を装い、七さんのアシストでよりリアリティを出す。今思えば、星木さんの怒号も、七さんの罵りも、全て奴を挑発するためだったのだろうか。

恐ろしい。反面、頼もしい。

タネを知っている側からみると、何とも滑稽な場面だった。さっきまでのシリアス感はどこへやら。緊張なんて、とてもじゃないが、維持できない。ついでに、恐怖もどこかに吹き飛んでいた。

勝てる気がしなかった。

奴が徐々に速足になる。星木さんがヨロヨロと両腕を胸の前で構える。直後、奴が星木さんに殴り掛かり、

そして奴が宙を舞う。

遊園地で見た、あの技。奴は一声も発することなく、代わりに液状の何かを吐き出しながら私達のすぐ横を飛び過ぎていった。

ガッ、という、まるで頭蓋骨とコンクリートの床がぶつかったような音がし、さらに、ドシャッ、という、この世のものとは思えないほど爽快感溢れる小気味良い心が洗われるような音が、響いた。

私は一応振り返る。が、確認するまでもなく奴は気絶していた。それなりに整っていた顔は、驚きと、（恐らく顔面から）床に落ちた衝撃で、歯が欠け、締まりのない、無惨な状態に変わっていた。心が、洗われ

「（人為ー！）」

私の思考を遮ったのは、星木さんの大声のヒソヒソ声だった。何ならもう全て終わったような気でいた私は、それにかなり驚く。

見ると、彼は右手を前に突き出していた。その手には真つ黒い何かが握られている。無線だった。奴が懐にしまったあの無線を何故か持っている星木さん。考えられる可能性は、さっき奴を放り投げる一瞬で抜き取った、というものだが、それではプロのスリ並のテクニクだ。怖い怖い怖い。

それを見るやいなや、七さんは倒れている奴に駆け寄り、そして、

奴の顔面を踵で踏み付け出した。

「！？」

「（人為ー！！）」

星木さんがもう一度大ヒソヒソ声を発動。どうやら星木さんが考えていた行動とは違うらしい。……いや、それはそうだろう。

星木さんの声で、七さんは踏み付けるのを辞める。そして、こつちを向き『てへっ』のポーズを取った。何故か小慣れていた。思

いの外、可愛かった。

と、七さんはしゃがみ込み、奴の身体をまさぐり出した。軽くR指定でも付きそうなその光景に、私は「何しているのですか!？」と、ツッコもうとした。が、ツッコミを入れる直前に、七さんが奴の懷から携帯電話を取り出したのを見て、ハッとする。

さらにその時、外で車の止まる音がした。私は振り返る。すっかり失念していたヤクザ屋さんのことを、ようやくと思い出した。今更になって焦りを覚えた。が、

「あ、あー、聞こえますかー」

あろうことが、星木さんは無線に向かって喋り出した。「何しているのですか!?!？」と言おうと思ったが、よく聞けばそれは普段の星木さんの声より低く、奴の声によく似ていた。

「助けて下さい!!!」

突然、背後から切羽詰まった少女の声が聞こえ、私はもう一度振り返る。七さんが携帯を耳に当てていた。

「あつ、すみません……。えつ、あつ、場所? 場所は……二丁目の倉庫街で、何か、真っ黒くて怪しげな人がいっぱいいて」

七さんは、ヤクザが集まっているのを目撃し、焦って警察に電話している少女に成り切っていた。

嘘（後書き）

はい、というわけで、恒例の終わる終わる詐欺でした。

前回の後書きがあんな感じだったので、これは嘘をつかなければと思ひ、結果、こんな感じになりました。

さて、では、今度こそ本当に、フリとかではなく、あと一話です。

ラスト（前書き）

終わります

ラスト

「その後、十分くらいで警察が駆け付け、ヤクザさんは一網打尽になりましたとさ」

「……まじで？」

信じられない、といった表情の唯に私は「大まじです」と返し、大きく息を吐く。

あの事件から一週間。私の生活にも、ようやく静けさが戻ってきた。

あの日、警察が到着し、私達は被害者なんだが重要参考人なんだか、よくわからないけれど警察に連れていかれ、丸一日以上拘束され、解放されたのは水曜日の朝。しかし、心身共にクタクタだった私はその日も学校を休んだ。そして翌日学校に行くと、先生には呼び出され、同級生からは質問攻めに合い、しかも先週は土曜日にも授業があつたためそれは土曜日まで続き、本当に先週は散々だった。

週が明けると、さすがに大勢から詰め寄られることはなくなつた。が、代わりに唯が朝っぱらから根掘り葉掘り聞いてきて、私のため息混じりに質問に答え、現在時刻は七時五十分である。

「それにしても、よくヤクザを十分も足止めできたね」

「全くよ。彼の口八丁には心底驚いたわ。何なら三十分くらいは留めておけそうだったもの」

「それと、十分に警察が来るのも早くない？」

「それもその通り。まあ、七さんの演技力が凄過ぎたってことなのでしょよ」

「……………疲れてる？」

「あ、やっと気付いた？」

「いや、何か喋り方がぞんざい」

「それは申し訳ございませんでしたね」

私は何度目かのため息つく。そして、この話をもう何度しただろうと思い、さらにくたびれる。

というか、こいつ今日に限って何朝七時登校とかしてんだよ。どんだけ聞きたかつんだよ、というイライラの籠った私の視線を受け、さすがに空気を読んだ唯は、「さ、さーて、予習でもしよっかなー」と言い、窓際の自席に戻っていった。

鞆をゴソゴソ漁りながら「あれー？ 数学の教科書とノートと問題集がないぞー？」などと言っている唯を横目に、私はそつと安堵の息を吐く。

実は、唯には話していないことがある。無論、星木さんのことだ。倉庫でのこと、そして、一昨日の放課後のことも。

土曜日。授業が終わり、質問攻めも一段落し、たまった生徒会業務もやり終えた私が、疲れたきつた身体で校門へと歩いていくと、七さんと星木さんが校門で待ち構えていた。

「ご機嫌いかが？ 凜さん」

七さんはずいぶん上品な感じで挨拶してきた。学校では隣の席だが、結局今までもろくに話もできなかった。だからツツコまないで手

を振った。

「こんにちは良真義さん。俺と付き合ってくれませんか」

星木さんと話すのもこれまた久しぶりだったので、私はツツコミないでUターンした。

と、二人が慌てて追いかけて来たので、私も全力で逃げた。が、捕まった。とりあえず、一旦体育館裏に移動することになり、そして

「ごめんなさい」

私は、頭を下げ、はっきりと断った。

「……………ど、うして、ですかね？」

星木さんには似合わない歯切れの悪いその声に、私は胸が痛む。

星木さんには何度も助けられた。これまでのことで、少し変わってはいるものの、悪い人ではないということも十二分に分かった。でも

「ダメなんです。生理的に。髪を染める人を認めることが、私にはどうしても無理なんです！」

私は、顔を上げることができない。自分でも、こんな不実な断り方はないだろうと思うからだ。

私の返事を聞いてから、星木さんは一言も喋らない。傷つけて、しまっただろうか。

「……ごめんなさい。でも」

その時、不意を突くように、星木さんが声を発した。

「あの、俺、髪染めてませんけど？」

「は？」

私はバツと顔を上げる。……え？ 今何て？

「母親の遺伝で、俺は生まれた時から金髪でしたよ？」

「え？」

ちょっと待て。仮にそれが本当だとした場合、星木さんは、成績が学年トップで、サッカー部のエースで、背が高く、友達思いで、純正の金髪イケメン。いやいや待て待てちょっと待て、例えば仮にもし万が一そうだった場合、えっと、いや、だって、そんな鮮やかな金髪が。

私が星木さんの金髪をまじまじ見つめていると、私の後ろにいた七さんが口を挟んだ。

「ちなみに、私は髪染めてるけど」

「はあああああ!!?」

「え、ダメなの?　じゃあ私達のお友達としての付き合いは終わり?」

「そ、それは……」

「付き合って下さい!」

「え、ちよつ」

「凜さん!」

「良真義さん!」

「……っ!」

な、何コレ?　どうしたらいいの?　何を何からどうすれば
そして私は、頭痛さえ感じる頭で、一つの答えを導き出した。

「……す」

「『す』?」

「すみません!　今日は帰らせて下さようなら!」

「ええ!?」

「ちよつ、凜さん!?」

思い出すだけで頭が痛い。星木さんどころか、七さんにも、どう
接すればいいのか。
と、

「おおー！？　な、ちょっと凜、あれ何だ！？」

突然、唯が変な声を上げ、私を呼んだ。見れば、唯は窓ガラスに張り付いていた。私は深くため息をつく。今は馬鹿に構っている場合じゃないのに。しかし、唯が急かすので、私は渋々窓に近寄り、

星木さんと七さんが真っ黒い髪を携えて登校して来るのを見た。

私は思い切り頭を窓にぶつける。ゴンッ、という良い音が鳴る。二人はそれに気付き、

「あ、凜さんお早う」

「良真義さん、お早うございます」

普段通りの二人に、私はなんだか悩んでいるのが馬鹿らしくなった。堪えきれず、笑みがこぼれる。私は窓を勢いよく空けた。心地好い風が吹いていた。私は叫ぶ。

「藍さん、髪を染めるのは校則違反ですよー！」

< 完 >

ラスト（後書き）

先生は捕まり、美少女達は退学処分になりましたとき、めでたしめでたし。

本ツ当にめでたい！

終わりました！

まさか終わるとは思っていませんでしたが、終わりましたよー！！

長かったです。

前作とは人称を変えたり、話ラブコメテイストにしようと思ったけど失敗したり。

今回は漫画のボツネタではないため、細部が前作以上にテキトーで、伏線を張り忘れまくりました。

仕方ないから後付けの無理矢理なつじつま合わせを乱発したりして誤魔化し誤魔化し。

本当は、唯をもっと絡めるつもりだったし、七のお父さんは警部だったし、推理編ももっとビシッと決めるはずだったのですが……いや、もう何も言いません。

私には才能が無かった、それだけの話です。

と、いうわけで、私、『小説家になろう』を退会致します。

これは、嘘ではありません。

これまでお付き合いくださいました方々には大変申し訳ございませんが、最近は更新スピードもどんどん遅くなっていましたし、正直、限界を感じていました。

ですので、執筆のまね事からは、もうスッパリ身を退くことに決めました。

退会すると全部消えてしまいますので、さすがに明日とかではありませんが、十日後には去るつもりです。
今月の二十三日ですかね。

最後に、このような拙作をお読みくださいました皆様にお礼申し上げます。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7947u/>

虚虚

2011年11月17日19時52分発行